劇団foo-

「その十二支、諸説あり。」

【キャスト】

＊十二支

ネズミ…星広行　ウシ…二葉泰亮
トラ　…森智子　ウサギ…佐京充
リュウ…宮藤あずさ　ヘビ…中村真由香
ウマ　…山田盛生　ヒツジ…矢島遼大
サル　…平原未結　トリ　…増井豪
イヌ　…花田千紘　イノシシ…小澤瑞季
ネコ　…斉藤未来　イタチ…畠山豪介

＊神族

釈迦　…大村俊輔　水天…溝口優

【スタッフ】

＊舞台監督
和田悠（P・P・P）

＊音響
井上匠（Otochondria）

＊照明
河上賢一（ラセンス）

＊舞台美術協力
門馬雄太郎

＊映像・宣伝美術
SPIN―OFF

＊　今「十二支」

☆　前説がわりの一発目の生声。

溝口　「劇団ｆｏｏｌ！！！！番外公演！！！」
劇団員「その十二支！！諸説あり！！」
溝口　「始まり、始まりー！！！！！！！」

暗転

☆　薄暗い中。お客様は「？？？」の状況。ラストシーンのフェイク。

明転

水天　「はい。おやすみ」
釈迦　「あー…」

☆　暗闇の中、皆の元に行く水天。記憶を失う皆。

釈迦　「繰り返すんだね」
水天　「おやすみ」
釈迦　「終わらない道」
水天　「おやすみ」
釈迦　「何処までも」
水天　「おやすみ」
釈迦　「続いていく」
水天　「おやすみ」
釈迦　「まるで」
水天　「おやすみ」
釈迦　「いつまでも続く」
水天　「おやすみ」
釈迦　「螺旋」
水天　「おやすみ」
釈迦　「階段」
水天　「おやすみ」
釈迦　「僕たちは」
水天　「おやすみ」
釈迦　「今日」
水天　「おやすみ」

釈迦　「なにする？？」
水天　「おやすみ…なさい」
釈迦　「また…」
ネズミ「あの…いいですか？？？」

暗転

☆　暗闇の中、喧嘩をしている声がする。何かを競っているようだ…。やがて喧嘩別れをする…。静まり返る皆。各々本を持っている。

明転

全員　「…」

☆　釈迦がいる。

釈迦　「十二支…十二の周期…『諸説あり』…か…中々、過酷にして…便利な言葉だな」

☆　水天がやって来る。

水天　「お釈迦様」
釈迦　「…」
水天　「お釈迦様」
釈迦　「…」

☆　沈黙。

釈迦　「ね！？頑張ろ！？釈迦悩んでるよ！？今！？」
水天　「…え？」
釈迦　「うわー。ピュアな目。よく出来るね、その眼」
水天　「あら。ありがとう」
釈迦　「っていうかあれな…誰？って話よ」

☆　全員が正面を向く。

全員　「仏典では…釈迦の出世は…省略」
釈迦　「うお！びっくりした…ってか省略！？短っ！もうちょい説明しよ！？」
全員　「釈迦は誕生した直後に立ち上がって7歩歩き、右手で天を、左手で大地を指差したまま『天上天下唯我独尊』と説いた。暴走族の言葉で有名だね！この世界に生きる人々は誰一人として尊いものである！『諸説あり』」
釈迦　「褒められている気がしない…え？そんな感じ？？」
水天　「いーじゃない」

全員　「水天！」
水天　「はーい？」
全員　「日本においては、神仏習合時代に『水』の字つながりで『天之水分神・国之水分神』と習合した。水分神として本来は子供とは関係なかったと思われるが、『みくまり』の発音が…性別が無かったとも？『諸説あり』」
水天　「まだ喧嘩中？って感じなのかしら？皆」
釈迦　「お前順応凄いな…はぁ…見ての通りだよ」

☆　バラバラ(ソーシャルディスタンスを保って舞台上)にいる。

水天　「今年も…ずっとこうね…あ、本は出来たの？」
釈迦　「十二支の物語？」
水天　「もったいぶらないでまとめた話をしなさいよ…何に悩んでる訳？？」
釈迦　「んー…これからを？」
水天　「…」
釈迦　「まとめたのはここまでだ…」

☆　咳払い。

釈迦　「十二支の物語…むかーし、むかしのことです。神さまは困っていました。仕事を頼んでも、すぐにけんかが始まる事と、けんかになると体の大きな動物が、小さな動物に言う事をきかせていた事です。ある年の暮れに動物たちを集めて言いました」

☆　その当時に戻る。

釈迦　「来年からリーダーを決める。一年ごとの交代制にし、リーダーに従って仕事をしてもらう。来年の元旦にあいさつに来た１番から１２番までがリーダーだ！」

☆　ブーイングの嵐。

釈迦　「おい！聞け！なんだ！？きらいか！？」
全員　「好きだよ？」
釈迦　「え…ありがとう」

☆　水天が本を奪う。以降、十二支は台詞以外サイレント芝居。

水天　「そして神さまは、ネズミだけを呼び止めて言いました。『一番小さなお前を最初のリーダーにしたい。小さな動物に勇気を与える事と小さくともリーダーに従わなければいけない　事を示したい。何としても１番になれ』贔屓―」
釈迦　「大きな者が小さき者を虐げてどうする？」
水天　「はいはい…。で、神さまの気持ちがよーく分かったネズミは」

ネズミ「何としてでも1番になります」
水天「と答え、『きらわれてもしょうがない』と、かくごを決めました。噂を聞いたネコはネズミに尋ねました」
ネコ「元旦に神さまのところへ行けばいいの？？」
ネズミ「違う違う。二日の朝！『元旦はゆっくり家ですごすもの』って言うじゃん？」
ネコ「あー…そっか。二日の朝だね」
水天「ネズミの様子がいつもと少し違う事が気にはなりましたが、ネコは礼を言って帰っていきました。大晦日にネズミがウシの家に行ってのぞくと、ぶつぶつ言いながら支度をしていました」
ウシ「うおおおお！やってやらぁ！！今夜のうちに出かける！遅いのは自覚してるからな！！」
二人「ぶつぶつじゃねー！！」

☆ 本を奪う釈迦。

釈迦「『やっぱりねらい通りだ』と、ウシの背中にとび乗りました。そうとは知らぬウシは神さまの元へと歩きつづけ、夜明け前に門の前につく事ができました。元旦の朝日が昇り、神さまが門を開きました。ウシが門をくぐろうとすると、背中からネズミが『ぴょんっ』と飛び降り」
ネズミ「神さま、あけましておめでとうございます」
釈迦「と挨拶しました。神さまはにっこり笑い、1番の番号札を渡しました。ウシは2番になってしまいましたが…」
ウシ「気合が足りなかった！！ただ…2番なら大満足だ！！」
釈迦「神さまのお話の場に来ていなかったトラは噂を聞き」
トラ「本当かどうか分からないけど！ムダになるかもしれないけど！！皆に頼りにされている自分が外れるわけにはいかない」
釈迦「と、千里の道をかけぬけて3番目に門を潜りました。そのころトリは迷っていました。いつものように鳴き声を上げ、朝がきた事を皆に知らせるかどうかを迷っていましたが…」
トリ「神さまからもらった大切な仕事をやらないわけにはいかないですね～…うふふ。時は来た！成熟するのだ！！」
釈迦「と、いつもより大きな声で朝がきた事を告げました。リーダーになりたい動物たちは、布団からとびおきて支度を整え、急いで出発しました。そして、ウサギ、リュウ、ヘビ、ウマ、ヒツジ、サル、トリ、イヌの順で門をくぐりました」
ウサギ「この競争は開発の手立て…うふふ」
リュウ「大気を震わせ…今こそ世界を自然に戻す時…」
ヘビ「影から狙う…隠からこっそりと…シシシ」
ウマ「逆らう！この世の中に」
ヒツジ「どうせ…僕なんて…うふふふ」
サル「今こそ！背筋を伸ばし！為すべき事をなす時が来たぁ！！」
イヌ「滅びろクソ共―！！」

サル　「なんなんだ！貴様！勝手は許さんぞ！」
釈迦　「…途中でサルとイヌが大喧嘩をし、トリが間に入ってなんとかおさまりましたが…」
トリ　「はいはいー。ここから成熟してください、あなた達」
サル・イヌ「なに！？」
釈迦　「順番はうしろの方になってしまいました。門の前を走りすぎてしまったイノシシは急いで戻り、最後の１２番目に門を潜る事ができました」
イノ　「はは！仕方ないな！！やってしまった！！」
釈迦　「次の日の朝、ネコが門をたたくと…」
ネコ　「あら？」
釈迦　「呼んだのは昨日だ。今まで寝てたのか？顔でも洗って来いっ」
ネコ　「ああ…そう。そうなのね」
水天　「…可哀そうに」
釈迦　「家に帰ったネコは、いつも顔を洗うようになり、ネズミの言い訳を信じる事ができず、ネズミを追いかけ回すようになりました」
水天　「そして」
イタチ「知らせが来ませんでした。不公平です。もう一回やり直して下さい」
釈迦　「イタチは毎日、神様に会いに来ました」
水天　「困り果てた神さまは？」
釈迦　「それでは月の最初の日をお前の日にしてやろう。イタチの上に”つ”を付けて、『つ・いたち』でどうだ。それがお前さんの日だ。だがこれは内緒だぞ。どうかな？」
イタチ「…何も無いよりましです」
水天　「問題はこの先の物語って事？」
釈迦　「その後は…１２頭のリーダーと、なぜかは分かりませんが、『ついたち』　にだけ張り切るイタチを中心として、みなが協力しながら仕事をするようになりました」
水天　「言わなくていいの？１２の『螺旋』の話」
釈迦　「それを書きたい…ただ…」
水天　「？？」
釈迦　「これはね」

☆　ＯＰアクトの初期位置。

釈迦　「１番、ネズミ。陽気が色々に発現しようとする動き」

☆　ネズミが見ている。

釈迦　「２番、ウシ。生命エネルギーの様々な結合」

☆　ウシが見ている。

釈迦　「３番、トラ。形をとっての発生」

☆　トラが見つめる。

釈迦　「４番、ウサギ。開発の意」

☆　ウサギが見つめる。

釈迦　「５番、リュウ。生の活動」

☆　リュウが見つめる。

釈迦　「６番、ヘビ。陽盛の極、漸く陰に移ろうとする所」

☆　ヘビが見つめる。

釈迦　「７番、ウマ。上昇する陰と下退する陽との抵触」

☆　ウマが見つめる。

釈迦　「８番、ヒツジ。陰気の支配」

☆　ヒツジが見つめる。

釈迦　「９番、サル。果実の成熟」

☆　サルが見つめる。

釈迦　「１０番、トリ。酒熟して気の漏れる象。陰気の熟する所」

☆　トリが見つめる。

釈迦　「１１番、イヌ。統一退蔵」

☆　イヌが見つめる。

釈迦　「１２番、イノシシ。生命の完全な収蔵含蓄」

☆　笑顔のイノシシ。

釈迦　「そして…ネコとイタチ…」

☆　ネコとイタチが見つめる。

釈迦　「これは『諸説ある物語』の一つだ…そして…君達は覚えていない…新しい、いつも繰り返す諸説…終わらない『螺旋階段』」

☆　オープニングアクト。（いつも通り台詞と順番は適当です。あくまでイメージ）

釈迦　「これは必要な距離」
水天　「まぁまぁ…大変ねぇ」

☆　入れ替え。

ネズミ「それで喜ぶわけないじゃん」
ウシ　「うおおおお！！気合！！」
トラ　「トラは皆の想いを背負う…」
ウサギ「発明発明…うふふ」

☆　入れ替え。

リュウ「これは大いなる自然への回帰」
ヘビ　「蛇行しながらも狙う…」
ウマ　「その為に走れる」
ヒツジ「陰気…陰気…」

☆　入れ替え。

サル　「皆、背筋を伸ばそう！」
トリ　「成熟…もう少しで！あと少しで！！」
イヌ　「終わりだクソやろーがぁああ！！」
イノ　「思い切り走ればいい！！」

☆　入れ替え。

ネコ　「ニャー…ってね」
イタチ「何も無いより…」

☆　全員が集まる。

＊　今「０月」

ネズミ「あの…これなんです？」
ウシ　「うおおおお！なんだか気合が高まるぜー！！」
トラ　「責任？これも？？いいですね。背負いましょう」
釈迦　「はい、違いまーす」
ウサギ「センスが無いですねー…私ならこう…」
リュウ「空も飛びづらいな…」
ヘビ　「地面に潜りづらい…」
ウマ　「心肺機能の向上！！この範囲で走れと言う事ですね！」
ヒツジ「苦しい…死ぬ…」
サル　「いや！これはこれで背筋が伸びる！」
イヌ　「あ？殺すぞサル」
トリ　「はいはい。発展無し」
イノ　「あはは！良いと思う！！」
ウサギ「脳みそどうなっているのでしょう」
イノ　「聞き捨てならないな！！突撃しようか！あはは！！」
ネコ　「…私達呼ばれた意味ある？イタチ」
イタチ「…無い」

☆　皆が叫んでいる。
☆
釈迦　「釈迦バーリア！」

☆　喧嘩し始める。お互い近づけない。

釈迦　「はい。釈迦バリア」
ネズミ「え？なにこれ？？？」
釈迦　「はーい。ちゅうもーく。神さまはー君達１２の生き物を近づけないようにしました
　　ー」
サル　「はい！」
釈迦　「お、なんだいサル」
サル　「意味が分かりません！」
釈迦　「おー…意味が分からない…そうか…意味分からないか…へぇー…」

☆　止まる空気。

釈迦　「馬鹿か！？喧嘩ばっかりで何にもしないからだよ！？え？君達の本分は何！？」
全員　「本分？？？」

釈迦「月毎の！代表者に！！なったの！一応！！十二支ってわかるでしょ！？それがどうだ！？いつまで経ってもけんかを　し！誰も一月の代表をしない！と言う事で！先生は君達が仲良くなるまで距離を取る事にしました！期限は来年まで！」
ウシ「それ困るか？」
ウマ「特に…？？」
釈迦「それは…」
水天「月日の経過が分からないわ。交代しなければ皆同じ時期」
ヘビ「つまりなんだ」
水天「一月のまま。一年中」
全員「はぁ！？」
ヒツジ「終わった…しぬ」
リュウ「闇の始まり」
トラ「はい！！」
釈迦「はい、トラ」
トラ「死ぬと思います」
釈迦「え？うん？あれ？そう言ってるつもりだけど？あれー…聞いてなかった？聞いてたよね？うん、死ぬね。地球温暖化とかそういうレベルじゃないよ？わかる？大丈夫？」
イノ「走ればいい！」
釈迦「うん。うんそうだね？少し黙ろう」
イヌ「もう一回レースやって私が全員コロス」
釈迦「お前一番向いてない。釈迦のミステイク」
ウサギ「システムの見直しを！！」
釈迦「馬鹿。え？馬鹿？？出来る訳なくない？？（滑るネタ）うん、違うな。でもお前の意見はもっと違う。うん」
イノ「走れば…」
釈迦「いいでしょ？それね？違うから。安心して？」
サル「どうすればいいのですか！？」
釈迦「ストレート！うん、それでいい。あのね？仲良くしよ」
全員「仲良く…？？？」
釈迦「大変でしょ？自分の月だけだと。だから仲良くしないと…ということで釈迦バーリア」

☆　自分の場所に閉じ込められる。

ネズミ「ええ…そんな…」
釈迦「そんなー…な事態なんです。上手くやりましょ」
ネコ「あの」
釈迦「はい、ネコ」
ネコ「イタチと私は…何故？」
釈迦「呼んではいけなかった？？」
ネコ「…よくもまぁ」

釈迦　「これでネズミを追いかけられなくなった訳だ…イタチも…納得してないんだろう」
イタチ「いえ？別に…」
釈迦　「噛めないよう、傷付けないよう続きを始めようじゃないか！」

☆　去る皆。

水天　「１２の数字を自覚させるなら私達はいらなかったんじゃない？」
釈迦　「いいや。必要だよ」
水天　「何故？」
釈迦　「別にこれは試練じゃない。あの頃も今も…ってね、ただ今回は…」
水天　「はいはい…。じゃあ『また』一月からね」

☆　去ろうとする水天。

水天　「あら？行かないの？？」
釈迦　「ま。言い出したのは僕だからね」
水天　「言い出したから責任取るとか…そういうの流行らないわよ？」

☆　去る水天。

釈迦　「今年こそ…きっと、答えを待つよ」

＊　今「1月」

釈迦　「一月。ネズミ…子孫繁栄の象徴一月。スタートの年。一月とは睦月呼ばれる。親族が互いに往来し、仲睦まじく、宴をする月であるからと言われている。また稲の実を初めて水に浸す月を指す『実月（むつき）』から転じた…『諸説あり』」

☆　沈黙。

ネズミ「って言っても…」

☆　静か。

ネズミ「…少し前は賑やかだったのになぁ…仲良くって…言ってもなぁ…」

☆　過去。

ネズミ「うわぁああ！ちょっと待ってネコ！！」
ネコ　「ふしゃああああ！！」
ネズミ「ち、違うんだ！これは訳があって！！」
ネコ　「どういう訳ぇええ？？？」
ネズミ「あのね！1月2日って嘘ついたのは間違いないよ！でも…！！」
ネコ　「それで…レースに参加できなかったんでしょうが…！！」
ネズミ「それはそうなんだけど！！それは…！」
ネコ　「黙って食われろー！」
ネズミ「いやいやいやだめだめ絶対！！」
ネコ　「大人しくしろー！！」
釈迦　「これが後の所謂…ト○とジェ○ーである。『諸説あり』」
ネズミ「ぎゃあああああ！！いやいや！だから！！僕は…！！」

☆　居なくなっているネコ。

ネズミ「そういう事じゃなかったんだって…」

☆　自分の遊び道具を見る。

ネズミ「この月は年の一番初めで…お年玉！なんてものも貰えたりする…。僕はそういうものが欲しいんじゃないんだ…なのになぁ…」

☆　沈黙。

ネズミ「皆はどうだろう？一年の始まり…そこに対する思いはどう？きっと人によっては幸福だろう！…でも…人によっては不幸のスタートになる。幸福と不幸はいつも紙一重…僕は」

☆　ネコが居る。

ネズミ「…あの子を巻き込みたくは無かった…」
ウシ　「おう！どうしたよ！？ネズミ！！いや？一月ってか？あはは！！」
ネズミ「ウシは相変わらずだなぁ…こういう会話は許してくれるんだね。お釈迦様」
ウシ　「だな！相変わらずは相しても変わらずってな！あはは！！」
ネズミ「一番は…一番じゃない。きっとこれは終わりの数字」
ウシ　「…」
ネズミ「僕が思う事。分かる？」
ウシ　「分からんね」
ネズミ「一番にならなければよかった。そうすれば結果的にネコを騙す事もなかった…でも僕が一番だ」
ウシ　「俺の背中に乗ったからそりゃ一番だ！」

ネズミ「僕は…本当は一番になんて興味が無かった…。ね？見える？？」

☆　星を見る。

ネズミ「ニバンボシでよかったんだ。それだけなんだ」
ウシ　「俺が預けたからなぁ」
ネズミ「…」
ウシ　「あのレースの時…預けた背中だ！」
ネズミ「なにそれ」
ウシ　「ネズミの意味を知ってるか？」
ネズミ「生き物に意味なんて無いでしょ？」
ウシ　「違う違う。本当の魂の意味だ」
ネズミ「魂？？」
ウシ　「ネズミとは子孫繁栄の象徴だ。カッコいいだろ」
ネズミ「どこが？」
ウシ　「俺には背負えなかった。だからお前が背中に乗っているのも知っていて乗せたんだよ」
ネズミ「…」
ウシ　「俺は責任から逃げた。お前はわかっていながら1番を背負った。カッコいいじゃねぇか！」
ネズミ「…よくわからない」
ウシ　「な！いいか！俺はな！！」
ネズミ「いーよ。うるさいな。騙されたくせに」

☆　笑う。

ウシ　「ネコには話してやれよ」
ネコ　「許せない」
ネズミ「うん…」
ウシ　「もー！」
ネズミ「な、なに！？」
ウシ　「お前は誰もが逃げた一番を背負ったんだ！その覚悟と意志は誰でもねぇ！俺が知ってるぞ！」
ネズミ「うるさいな…叫ばないでよ」
ネコ　「叫びたい…！いつでも…！！」
ウシ　「触れ合えないなら！『この声』だろ！」
ネズミ「…ネコに伝わる？」
ウシ　「お前次第だ！あはは！！」
ネコ　「伝わる…きっと」
釈迦　「一月…ネズミ年。迎春の候…意味は『新春を迎えました』しかし…」

＊ 今「2月」

ネズミ「考えるよ。ネコとの…皆との想い出…」
ウシ　「想い出？よく分からんが！！お前がした『決断』！！頑張れ！！」
ネズミ「…今年で終わらせよ…」
ウシ　「うん？なんか言ったか！？」
ネズミ「ううん。大丈夫」
釈迦　「二月。ウシ…粘り強さと誠実の象徴」
ウシ　「頑張れよー…！ネズミ！！…さて」
釈迦　「放任に対して何も出来ないのが玉に傷」
ウシ　「よっし！！…どうしよ…仲良くなれかぁ…仲いいつもりだが…ん！よく分かんね！
　とりあえず頑張る！」
トラ　「頑張る事を背負う事かと」
ウサギ「うふふ…発明発明」
ウシ　「おいー…来るなよ、人の月に」
トラ　「考えましょう」
ウサギ「飛躍の兆候？？」
ウシ　「どういう事？」
トラ　「それは分かりませんが」
釈迦　「二月。旧暦二月を『如月』と呼ぶ。如月は中国での二月の異称をそのまま使ったもので、日本の『きさらぎ』という名称とは関係がない。『きさらぎ』という名前の由来には『諸説ある』」
トラ　「背負う物は変らずです」
ウサギ「発明の甲斐がありませんねー」
トラ　「もっと違う意味があるのでは？」
ウサギ「道は沢山」
ウシ　「どこ？？」
トラ　「この拘束…触れると」

☆　近づくと弾かれる。

トラ　「このように弾かれてしまいます」
ウシ　「だから仲良くなれって話だろ？」
ウサギ「ふふふ…ダメですね！発想がだめです！」
ウシ　「仲良くなればこの壁は取れるんだろ？」
ウサギ「いーえ！！それは凡才の発想！いいですか！？」

☆　壁越しにぶつぶつ言っている。

ウシ　「まぁ…これは放っておこう…で？」

トラ　「恐らく。今を試されているのではないかと？確証はありませんが…向き合う事が大事…かと？」
ウサギ「これは進化…！発展なのです！！」
ウシ　「え？というと？喧嘩も…しているのはサルとイヌだろ？…あと結果的にトリ」
ウサギ「そう！そこなのですよ！！いいですか？？仲良くしないと月が変わらない！非常におかしな問を神さまは投げました！！その裏を考えるのが肝！かと！！」
ウシ　「あっそ…俺は頑張るだけ！」
トラ　「皆が任せてくれれば！」
ウサギ「…」
ウシ　「ん？どうした？」
ウサギ「ふふふふー！なるほどです！」
トラ　「…いつもの考えタイムじゃないかな？」
ウシ　「だな…ま！気合だ！気合！！」
釈迦　「二月…大きな船が厄災を運ぶ

＊　今「3月」

ウサギ「ふむふむー」
トラ　「ウサギ」
ウサギ「はーい？」
トラ　「これは試練だと思う」
ウサギ「流石トラさん！理解してますねー」
トラ　「でも…何をどうすれば…頼ってもらわねば…」
釈迦　「三月は第3の月に当たり、３１日間ある。冬と春の境目の季節である。日本では、旧暦三月を『弥生（やよい）』と呼び、現在でも新暦三月の別名としても用いる。弥生の由来は、草木がいよいよ生い茂る月『木草弥や生ひ月（きくさいやおひづき）』が詰まって『やよひ』となったという説が有力である。…トラと言えば」
トラ　「食い殺すぞー！！」
釈迦　「なイメージがあるが本来は決断力と才覚があるとされている」
トラ　「…ウサギは意味を知っているの？」
ウサギ「さぁ？まだ確定ではありませんねー」
トラ　「…」
ウサギ「過去から学び、今日のために生き、未来に対して希望を持つ。大切なことは、何も疑問を持たない状態に陥らないことである」
トラ　「それは？」
ウサギ「人という種の名言ですー。私はこの言葉が好きでしてね！名前は確か…アイ…アイン…忘れました」
トラ　「それが何だというの？」

ウサギ「物語が動く前に疑問を持つ事、それは大事かと」
トラ「つまり？」
ウサギ「今は物語は動いていない。それに対して疑問を持つのですっ！！」
トラ「動いてると思うけど？」
ウサギ「いえいえ！まだだと私は思いますよー？発明発明！！」

☆ 一人でぶつぶつ言っている。

トラ「うーん」
ウサギ「決断出来ないのはわかります！気になるなら他の月と話してみるのもありかと！」
トラ「他の月…確かにそうね」
ウサギ「それか新しい薬の被検体になりますか！？」
トラ「あ…うん、ごめん、遠慮しておくね」
ウサギ「あらー！残念！！！」
トラ「そうだ。ここで立ち止まるな。決断だ」
ウサギ「ばいばい」
釈迦「春を迎えて草木がどんどん育つ時期で、いやが上にも生え繁ることを『いやおい』と言い、それが『やよい』になったと言われる『諸説あり』」
トラ「いやでも決めるんだ。自分の行動を」
釈迦「三月…多くの祭典の中止を決断」

＊ 今「4月」

ウサギ「（鼻唄）」
釈迦「…」
ウサギ「おお！これは新たなベイビー！！」
釈迦「…」
ウサギ「（鼻唄）」
釈迦「四月。旧暦四月を『卯月（うづき）』と呼び、現在では新暦四月の別名としても用いる。卯月の由来は、卯の花が咲く月『卯の花月（うのはなづき）』を略したものというのが定説となっている。しかし、卯月の由来は別にあって、卯月に咲く花だから卯の花と呼ぶのだとする『諸説あり』」
ウサギ「（鼻唄）」
釈迦「あれ？ウサギさん？」
ウサギ「なんでしょー！？」
釈迦「お話進めて頂いても…」
ウサギ「あ！どうぞ！進めてください―！」
釈迦「え？いいの？」

ウサギ「(鼻唄)」
釈迦「…年度の始まる月で、発明の時期。ウサギは飛躍の象徴と言われる」
ウサギ「私は失敗した事がありません。ただ、1万通りの上手く行かない方法を見つけただけですねー！」
釈迦「たくましい」
ウサギ「生きている物は逞しいと思うのですよ！今日も失敗するのでどうぞお先に！」
釈迦「四月…あの宣言」

☆ 水天が顔を出す。

水天「あら？お釈迦様が考えるの？」
釈迦「完璧ではないからね」
水天「完璧なものなどいないと思って作ったのは貴方じゃない？」
釈迦「痛い所つくなー」
トラ「…え？」

＊ 今「5月」

リュウ「ん…トラか」
トラ「…これ何？」
リュウ「距離を取った飲み会だ。文句が？」
釈迦「リュウ。権力の象徴」
ヘビ「シシシ…影に籠ればいい」
釈迦「ヘビ。死と再生の象徴」
ウマ「距離を縮めなくとも！出来る事はある！…と、思う！！」
釈迦「ウマ。豊作と健康の象徴」
ネズミ「あはは…やぁ」
ウシ「こういうのも悪くない！！」
水天「ちなみにこれが後のオンライン飲み会である」
リュウ「こうして仲が良いのに、仲良くせよとは…神の座を奪うか」
トラ「滅多な事言わないでください」
釈迦「旧暦五月を『皐月（さつき）』と呼び、現在では新暦五月の別名としても用いる。『さつき』は、この月は田植えをする月であることから『早苗月（さなへつき）』と言っていたのが短くなったものである。また、『サ』という言葉自体に田植えの意味があるので、『さつき』だけで『田植の月』になるとする。『諸説あり』。なお、旧暦の五月は新暦では六月から七月に当たり、梅雨の季節である。つまり…」
ヘビ「影から狙う…」
ウマ「やってやるか！」
釈迦「五月、六月、七月は仲がいい」

トラ　「何故ネズミとウシまで？」
ネズミ「あー…まぁ？」
ウシ　「社会的距離を作られたらその中で生きればいいとの結論だ！」
トラ　「…根本的解決になってる？それ？」
リュウ「トラは何の用か？」
トラ　「…特に、少し今回の事で他の月と話そうかと思いまして」
リュウ「ほう…権力が欲しいか？」
トラ　「いやいや…極端」
リュウ「我らは喧嘩はしておらん」
ヘビ　「喧嘩しているのはこの先の月…」
ウマ　「イノシシを除いた皆だな！！」
ネズミ「あの…」
ウシ　「…」
ウマ　「迷惑だな！健康ならいいけど！走るか！」
ヘビ　「勝手にやって…」
リュウ「…神が決めた試練に悩むか？」
トラ　「…まぁ…」
ネズミ「あの…さ」
ヘビ　「気まぐれな意見だろう…我らは困らない」
ウマ　「聞いているかも知れないぞ！言葉はせめて選ぼう！」
ネズミ「…えーと」
リュウ「あえて無視をしていたが…なんだ？ネズミ。言いたい事があるのか？」
ネズミ「あの…」

☆　皆が見る。

ネズミ「ごめん、何でもない」
ヘビ　「シシシ…！ネズミはいつもだな」
トラ　「あのですね。皆さんはどう考えているのですか？」
リュウ「というと？」
トラ　「一月から変わらないと言う事は…１１種要らないという事なのでは？」
ヘビ　「それが？」
トラ　「え？」
ヘビ　「そうなったらそうなった。再生すればいいだけ」
リュウ「権利を貰い、より天に近い自然を作り出す」
ウマ　「走り！新たな豊作を各地にもたらす！！それがいい！」
ウシ　「おー。なるほど」
リュウ「どうだ？のらないか？」
ウシ　「いや、俺はいい」
トラ　「ウシさん」
リュウ「なぜ？」
ウシ　「誠実さに欠けるからだ」

ヘビ　「くそ真面目…シシシ」
ウマ　「自然を謳歌できるのはいい事だぞ？」
リュウ「トラは？過去のレースなどに縛られるか？今こそ変えるべきだと思うが？」
トラ　「…ごめんなさい。決断の材料に欠けます」
ヘビ　「決断とは？」
ネズミ「あの！！！！」

☆　静かになる。

ネズミ「あの…仲良くなれって…そういう事…じゃ…無いと思う」
リュウ「では？」
ヘビ　「まるで答えを知ってるかのようじゃないか…一番さんよ」
トラ　「ヘビ！」
ヘビ　「黙っていただけで…お前を信用なんて誰もしてないかと思うぞ？シシシ」
ネズミ「それは…」
リュウ「トラよ。お前はどう思うのだ？」
トラ　「…なんとも」
リュウ「下らないな。我らはこのままでいい。新たな道を見つければいいだけだからな」
ネズミ「聞いてください…」
ネコ　「ねーずみー…」
ネズミ「ネコ！」
ネコ　「今日こそ食ってやる」
リュウ「ほらな。こんなお前の話を誰が聞く？」
ネコ　「シャアア！！！」
ネズミ「クソ…」

☆　逃げる。

リュウ「卑怯者は下がると良い。権力が全てだ」
トラ　「…ネズミに対して…そう思ってたんですね」
リュウ「聞かせて欲しいが…そう思われても仕方あるまい」
ヘビ　「さ、おひらきおひらき」
ウマ　「健康第一だぞ！ネズミ！」
ウシ　「…ネズミには悪いが…レースってのは疑われるもんだ。仕方ない」
トラ　「…ただの順番なのに」
ウシ　「そう思えないことだってある…ネコや…イタチも」
リュウ「そういう事だ…すまんな…イタチか」
釈迦　「五月は新たな芽吹き…そしてあの宣言から一ヶ月…我慢が出来なくなっていったんだ」

☆　イタチが居る。

リュウ　「そういえば…五月はイタチの生まれる時期だ」

＊　今「５・５月」

釈迦　「暗雲立ち込める…梅雨かな。イタチの時期だなぁ」
水天　「そーね」
釈迦　「あの頃…イタチは…」

☆　回想。

イタチ　「レース？？選ばれた１２の動物…か。なるほど…やってみてもいいかな…！新年で挨拶をする…？これだけ？よし！！やるぞ！！大丈夫！きっと選ばれるよ！皆！イタチはすばしっこいからな！」

☆　道が遠い。一生懸命なイタチ。

イタチ　「遠いな…あはは。結構怪我しちゃった…でも！待ってろよー！皆！イタチは選ばれる！！…いたたたたた…」
釈迦　「一番はネズミ！」
イタチ　「あら？ウシじゃない…どうしよ？３番目に入れるな…あれ？」

☆　皆が順番に来る。

イタチ　「他の動物だ…。皆、一番を目指しているんだな…よし…！１２番目に入れればいいから譲ってあげよう！！」

☆　次々と１１番目まで決まる。

イタチ　「…よし、これで最後だな…あの！かみ…」
イノ　「うおおおおおおお！！！」
イタチ　「え？」
イノ　「間に合った！１２番目か！あはは！」
釈迦　「うん…」
イノ　「あけましておめでとうございます！！」
釈迦　「１２番目が決まった。これで十二支だ」
イノ　「いやほほほほう！！」
水天　「これが後の『猪突猛進』である♡」
イタチ　「あ…あの」
釈迦　「ん？」

イタチ　「あ…」

☆　隠れるイタチ。

釈迦　　「気の所為かな？？？」

☆　戸が閉まる。

イタチ　「あ…。しょうがないか…譲ったのは…こっちだし…うん！仕方ない！！」

☆　十二支が文句を言う。（ツイッターの暗喩）

仲間１　「おい…選ばれなかったって」
仲間２　「違う奴がいった方が良かったんじゃないか？」
仲間３　「譲ったって…その月の代表になれたかもしれないのに…」
仲間４　「嘘つき」
仲間５　「偽善者」
仲間６　「あいつ…たどり着かなかっただけじゃない？」
仲間７　「やめなよ！」
仲間８　「あ、味方が来た」
仲間９　「正義の味方はいいけど、現実これだよね」
仲間１０　「ださ」
仲間１１　「言い訳しろよー」
仲間１２　「だんまり！うけるー」
イタチ　「そ、そんな事無い…なんで…なんでそんなに簡単に頑張っている奴を叩くんだよ？呟いても…！本人には大声に聞こえてしまうんだよ！なんで！！なんでだよ…！！」
仲間達　「そう思うなら証明したら？」
イタチ　「証明…証明…どうやって…」
仲間達　「ちゃんと行ったなら出来るでしょ？ワラワラワラ」
イタチ　「行った…行った理由…」

☆　釈迦の所に来る。

イタチ　「あ…あの…知らせが来ませんでした。不公平です。もう一回やり直して下さい」
釈迦　　「イタチは毎日、神様に会いに来ました」
イタチ　「あ…あの…」
釈迦　　「それでは月の最初の日をお前の日にしてやろうイタチの上に”つ“を付けて『つ・いたち』でどうだ。それがお前さんの日だ。だがこれは内緒だぞ。どうかな？」
イタチ　「…何も無いよりましです」

仲間１　「うわ…恥知らず」
仲間２　「あれと一緒にしてほしくないわ」
仲間３　「うけるー」
仲間４　「帰ってくんな」
イタチ　「やめろ…」
仲間５　「優しさのはき違えオツ」
仲間６　「言いたいことあるなら言えば」
イタチ　「違うんだ！あの日行ったんだ！！」
仲間７　「夢じゃない？」
仲間８　「病院をオススメします」
仲間９　「世の中にはそういう病気もあるんです」
仲間１０「マジレス」
仲間１１「ワラワラ」
全員　「ワラワラワラ」
イタチ　「やめろよ…！君達がつぶやく事は簡単に心を壊す！助けて欲しいのに」
全員　「ワラワラ」
イタチ　「どうして…皆の為に走った…日々は？？なんなんだ？」

☆　怪我を見る。

イタチ　「こんな傷…！こんな傷！！こんな傷！！！！」

☆　掻きむしる。

イタチ　「心の傷より…全然マシだ…」

☆　俯くイタチ。笑い声が雨の音に変わる…。釈迦が悲しげに見つめる。頭を撫でて去る水天。ヘビ。

釈迦　「全く…」
ヘビ　「醜いな…種とは…シシシ」

＊　今「６月」

ウマ　「ん！？なんだ急に」
ヘビ　「ヘビは賢いのさ。賢いが故にズルという言葉がつく」
ウマ　「ずる賢いって事か！」
ヘビ　「シシシ…まぁそういう事だ」

釈迦「六月…『水無月』とも言う。水無月の由来には説があるが、水無月の『無』は『の』を意味する連体助詞『な』であり『水の月』であるとする説が有力である。神無月の『無』が『の』で、『神の月』を意味するのと同様と考えられる。田植が終わって田んぼに水を張る必要のある月『水張月（みずはりづき）』『水月（みなづき）』であるとする…『諸説あり』ちなみに」
ヘビ「シシシ…また雨が降るなー…」
釈迦「ヘビと雨はつながりが深い」
ヘビ「仲良くなるか、ならないかなんて問題が各々にあるだろうに」
ウマ「知っているのか！」
ヘビ「観察するのさ…なにが大事なのかね」
ウマ「じゃあ言えば良い！」
ヘビ「そんな単純かと思うのか？」
ウマ「思わない！走れ！皆！」
ヘビ「豊作と健康とは良く言ったものだ…シシシ」
ウマ「健康で居よう！！」
ヘビ「はいはい」
ウマ「して！どうなのか！？」
ヘビ「…ネズミは隠し事、ウシは加担、トラは迷い、ウサギは成長、リュウは改革、ヘビは脱皮、ネコは恨み、イタチは遺棄。各々既にすれ違っている。神は試しているのさ」
ウマ「どうすればいい！？」
ヘビ「…そもそも仲良くなれるゲームではなかったのさ。あの頃から」
ウマ「あの頃？十二支のレースか！？」
ヘビ「種は何処まで行っても離れる。そういう風に出来ているからね…シシシ」
ウマ「ずっと一月は困るぞ！」
ヘビ「こっちは困らない。脱皮すればいいからね」
ウマ「うーむ」
ヘビ「頑張れば？」
ウマ「わかりやすい！」
ヘビ「イノシシといい勝負だねぇ」
ウマ「イノシシとは仲いいぞ！」
ヘビ「はいはい」
ウマ「ヘビ！一つ聞きたい！」
ヘビ「なに？」
ウマ「達観していて楽しいか！？付き合いの長さでその位わかる！」
ヘビ「達観してる？」
ウマ「うん！」
ヘビ「達観はトリ。蛇行しているだけだよ。前には進んでる」
ウマ「達観って初めて使った！いいな！達観！」
ヘビ「聞いてないし」
ウマ「逆境こそ喜び陰と陽の橋渡しをする！」

ヘビ「あっそ…しばらく地面に潜るよ…シシシ」
ウマ「あ！あと！ジューン・ブライドってあるらしいぞ！」
ヘビ「はぁ…あのね」
釈迦「日本におけるジューン・ブライドは、六月の雨が多くジメジメした薄暗い雰囲気で結婚する人が少ない事に困ったブライダル業界が１９７０年代ごろから始めたものであり、それまでは知られていなかった」
ヘビ「人が作った勝手な儀式」
ウマ「なるほど！では！」
ヘビ「…雨は変らず降るのに…」
釈迦「田植えが済み、田に水を張る必要があることから“水の月”→『水無月』と呼ばれるようになった。六月…結局全ての祭り事は水に流れる」
ヘビ「ただ…『振る』だけ…シシシ」

＊ 今「7月」

釈迦「七月（しちがつ、ながつ）日本では、旧暦七月を『文月（ふづき、ふみづき）』と呼び、現在では新暦七月の別名としても用いる。文月の由来は、七月七日の七夕に詩歌を献じたり、書物を夜風に曝したりする風習があるからというのが定説となっている。しかし、七夕の行事は奈良時代に中国から伝わったもので、元々日本にはないものである。『諸説あり』」
ウマ「…」
ヒツジ「ダメ…死ぬ…あー…死ぬ。結局。…死ぬ」
釈迦「羊…家族安泰の象徴…であるが」
ヒツジ「結局死ぬ」
釈迦「冒頭で話した通り陰気の支配である」
サル「まだまだ！ご指導を！」
釈迦「猿…利口・好奇心の象徴」
サル「まだやれます！！」
イノ「あはは！！いい心がけだ！！」
釈迦「猪…無病息災の象徴と同時に…」
イノ「たてぇーい！！」
釈迦「一途で情熱的」
イノ「お！ウマ！いい所に来たな！こいつらを鍛えているんだ！」
ウマ「んー…ウマでも分からない。なんで？」
イノ「仲良くなるには！命を燃やせ！」
ウマ「んー…そうか…似てると思われてたんだけど？んー…」
イノ「はい！腕立て２０００回！」
サル「はい！」
ウマ「やめよ？え？やめよ？わかる？？」

イノ　「おお！ウマ！」
ウマ　「うんー話してたんだよなー？馬だよー？」
イノ　「ウマ！いい所に来たな！こいつらを鍛えているんだ！」
ウマ　「さっき聞いたの！それ！わかる？」
イノ　「おお！ウマ！」
ウマ　「エンドレス！」
イノ　「命を…」
ウマ　「燃やして仲良くなるんでしょ？え？何？聞いてないの？」
ヒツジ　「た、助けて」
ウマ　「ほら！エスオーエス！出てる！」
イノ　「ウマ！いい所に来たな！こいつらを」
ウマ　「おいー。いい加減にしよ？ね？ヒツジ死ぬよ？」
ヒツジ　「あ…もう…だめ」
イノ　「どーしたぁあああ！！」
ヒツジ　「死ぬ…食われる…」
ウマ　「最悪な状況になってる」
イノ　「きあ」
ウマ　「気合はいいーもういいー落ち着こう？」
イノ　「む」
ウマ　「ヘビとリュウに助けて欲しい」
イノ　「なんの話だ？」
ウマ　「なんでもない！…で？」
ヒツジ　「見ての通り…」
サル　「鍛えているのです！」
ウマ　「仲良くなるのに？？」
サル　「イヌに負けてはならないのです！」
ウマ　「勝ち負けじゃないんだーわかるかなー？」
ヒツジ　「死ぬ…死こそ繁栄…」
ウマ　「そういう哲学みたいなのもいいんだー」
イノ　「ウマ！いい所に来たな！こいつらを鍛えているんだ」
ウマ　「壊れたのかな？落ち着こう！」

☆　ウマが話している。

釈迦　「ウマが頑張ってるなぁ」
水天　「螺旋の話、しなくていいの？」
釈迦　「…」
水天　「あ、そ」
ウマ　「…って事で！上半期は大変な訳！だから走って来た！」
ヒツジ　「…と言われても」
サル　「従うまで！」
イノ　「ウマ！いい所に来たな！こいつらを鍛えているんだ」

ウマ　「待て待て待て…なんでそこに戻る？え？台詞忘れた？」
イノ　「ふふ」
ウマ　「笑ってんじゃねぇ」
ヒツジ「で、どうするか…って投げかけ？」
ウマ　「…ネズミは隠し事、ウシは加担、トラは迷い、ウサギは成長、リュウは改革、ヘビは脱皮、ネコは恨み、イタチは遺棄。各々既にすれ違っている。神は試しているのさ」
イノ　「あはは！あれか！」
ウマ　「絶対分かってないだろ！ヘビに言われた！すれ違っているんだと」
ヒツジ「そりゃそうでしょ？」
サル　「種族が違う！」
ウマ　「な！でも引っかかる！」
イノ　「何に引っかかるのだ！？」
ウマ　「実はネズミが隠してる事があるから、この順番なんじゃないか！って！」
イノ　「…なるほどな！！」
ウマ　「ま！分からんけど！とにかく！伝えた！頼むぞ！下半期！」
ヒツジ「雑…死にたい」
サル　「任された！」
イノ　「右に同じ！」
釈迦　「七月…あの大きな輪が切れる」

＊　今「8月」

釈迦　「八月（はちがつ）は、『葉月（はづき）』と呼び、現在では新暦八月の別名としても用いる。葉月の由来は諸説ある。木の葉が紅葉して落ちる月『葉落ち月』『葉月』であるという説が有名である。他には、稲の穂が張る『穂張り月（ほはりづき）』という説や、雁が初めて来る『初来月（はつきづき）』という説、南方からの台風が多く来る『南風月（はえづき）』という。『諸説あり』そして…」
ヒツジ「…あー…嵐…嵐の月…僕の様…家族安泰…ね」
釈迦　「最も意味と性格が違う年でもある」
ヒツジ「あー…死にたい」
トリ　「死にたい！？成熟が足りませんな！実に足らない！」
ヒツジ「うるさ…」
トリ　「私が起こさなければ、皆レースに参加出来なかったんですよ！？」
ヒツジ「はいはい」
トリ　「失礼！失礼な反応！！」
ヒツジ「もう面倒な事は嫌。苦しい。死にたい」
トリ　「なるほど！で？」
ヒツジ「耐えられない。生きる事が」

トリ　「ほう！で？」
ヒツジ「だから！！もう皆諦めればいいの！種族が違うんだから！」
トリ　「なるほど！！で？」
ヒツジ「勝手に滅べば？理解なんてないんだから」
トリ　「なるほど！で？」
ヒツジ「だーかーらー！家族安泰なんて無理なの！考え方が違うの！」
トリ　「なるほどー！で？」
ヒツジ「あー！うるさい！」
トリ　「ほほう！うるさいと？受け入れる癖にうるさいと？？熟してませんな」
ヒツジ「うるさいうるさい！！」
トリ　「うるさい！で？」
ヒツジ「来るな！」
トリ　「来てませんが？」

☆　奇妙な距離。トリがバリアに触れる。

トリ　「近づけません」
ヒツジ「じゃあ、話しかけないで」
トリ　「ほうほう！自分で決められるのに先ほど話してました！」
ヒツジ「何？聞いてたの…性格」
トリ　「悪い？おやおやおや？おかしいですね？閉じこもりたいのに聞いて欲しいとは！」
ヒツジ「なんも知らない癖に」
トリ　「では…お死にになれば？」
ヒツジ「え？」
トリ　「見届けます。それこそ成熟した世界なら」
ヒツジ「狂ってる」
トリ　「狂っているのは貴方では？言いたいのに黙る。黙るくせに言いたがる。死にたいのに文句を言う。言うくせに実行しない、実行しない癖にまた喋る。繰り返すだけ」
ヒツジ「は？私の何も」
トリ　「知らない癖に？出た出た知らない癖に！コケコッコー」
ヒツジ「何？コケコッコーって」
トリ　「鳴き声ですが？」
ヒツジ「その鳴き声がいらいらする…あのレースの時から！！あのレース…？？？」
トリ　「コケコッコー！」
ヒツジ「…」
トリ　「あれ？いらいらするのでは？」
ヒツジ「一人にして」
トリ　「おセンチですね？成熟には程遠い。お？そろそろ喧嘩の時かな？？」

☆　トリ去る。

釈迦　「八月…パッと咲く花火が夢のように」

＊　今「9月」

ネズミ「ネコ！聞いて！」
ネコ　「聞くか！」
ネズミ「うあああ！！」
ネコ　「あはははは」

☆　ネコが立ち止まる。

ネコ　「はは…ははは…何してるんだろう…私…」

☆　ヒグラシが鳴く…。

ネコ　「私…何してるんだろう…ねぇ…」

☆　風に消える言葉。

サル　「背筋を伸ばす！伸ばす！！！」

☆　必死に鍛えているサル。

釈迦　「九月（くがつ）は『長月（ながつき）』と呼び、現在では新暦九月の別名としても用いる。長月の由来は、『夜長月（よながつき）』の略であるとする説が最も有力である。他に、『稲刈月（いねかりづき）』が『ねかづき』となり『ながつき』となったという…ま、『諸説あり』…か」

イヌ　「サルー！！」
サル　「うん！来たな！」
イヌ　「今日こそぶち殺す！」
サル　「かかって来い！」
イヌ　「ぬがぁあああああ！！」

☆　釈迦のバリアで近づけない。

サル　「こいやぁああ！いぬぅううう！！！」
イヌ　「準備は整っている！！」
釈迦　「んー…あのね」

水天「では♪（咳払い）ここで犬猿の仲のご説明をします♡」
釈迦「元々はとっても仲が良かったイヌとサル」
二人「うふふーあははー」
釈迦「ところが」
サル「あ！見て！イヌ！向こうに木の実がある！あれで遊ぼう！」
イヌ「おけー！！！！」
サル「…よし、今のうちに！」
イヌ「あれ？サル居ないな？」
サル「先にゴール！！」
イヌ「えええ！！！！！」
釈迦「という事がありイヌはサルを見るとぶちギレる」
水天「ってのが、世に言われている『犬猿の仲』」
トリ「はい！終了――！！熟れてませんね！成熟が足りません！」
釈迦「トリが仲裁に入りなんとかなりました…ちゃんちゃん」
水天「神さまのそういう所が問題だと思うわ」
釈迦「ね。何も言えない。それが」
サル「さぁ！こいこい！！」
イヌ「ぶっころーす！！」
トリ「まぁまぁ」
釈迦「神さまの残念な所だ…」
サル「鍛錬！鍛錬！」
イヌ「ころすころーす！！」
水天「ちなみにサルは知能が高く、神の使いであると信じられてきました。よって、サルは賢者を象徴する動物となっています～」
イヌ「さぁあああるうううう！！！」
サル「ははは！鍛えるのみ！！」
イヌ「あああ！？」
トリ「ほらほら！黙りましょう？今はそのような時ではありません」
イヌ「この壁がなくなったら殺す」
サル「やってみろ！あはははは！！」
イヌ「この…！！」
トリ「はいはい。終り」
イヌ「あの時、川に落ちなければこっちが先だったんだ」
サル「競争心！！友情は時に争う」
釈迦「十二支の動物の順番は、元旦に神様の所に挨拶に来た順番だと言われています。サルは９番目、イヌは１１番目に神様の所に来ました。この時、イヌとサルは一緒に出発するほど仲が良かったそうです。ところが真剣に歩いているうちに、いつしかお互いに競争心が湧き上がってきて、先を争うようになりました。さらに途中の丸太の橋で、お互い先に渡ろうとした結果、一緒に川に落ちてしまったこともあって、言い争いが続きました。それを見て」
トリ「まぁまぁ、とにかく一刻も早く神様の所に行きましょう」

釈迦「と、仲裁に入ったのがトリでした。そうやって何とか神様の所に着きましたが、順番は『サル』『トリ』『イヌ』と、トリがサルとイヌに挟まれた形になったそうです。これが由来だとすると、『犬猿の仲』とは“ただ仲が悪い”ではなくて“最初は仲が良かったけれども、何かのキッカケで悪くなった”とも言える『諸説あり』…んー神が悪いというのは簡単だ…でも」

サル「あの時は！自分の使命を全うしただけだ！」

イヌ「あああ！？」

トリ「はい、近づけないなら終わりー」

釈迦「問題は…心だと思うよ。九月…見えない未来」

水天「…」

釈迦「わかるだろ？」

水天「そうねぇ」

釈迦「この話はね…伝えなかった１６人の闇の話だよ」

水天「あら？私も含まれた？」

釈迦「皆、悩み、抱え、そこからどうするか…？じゃないかな。神様でも分からない未来はあるさ」

水天「はいはい」

釈迦「分からない未来はかけないよ…どんな未来でも続くとはそういう事だ」

＊ 今「１０月」

釈迦「十月（じゅうがつ）は、旧暦十月を『神無月（かんなづき、かみなしづき）』と呼び、出雲の出雲大社に全国の神様が集まって一年の事を話し合うため、出雲以外には神様が居なくなる月の意味というものがあり、これは平安時代から言われているあてずっぽうの語源である。出雲では『神在月』といわれる『諸説あり』」

トリ「イヌさんとサルさんはいつも喧嘩してますねぇ」

イヌ「何今更？」

イノ「全く！」

イヌ「なんでいる？」

イノ「はは！月が近いから！！」

イヌ「だから来たの？」

イノ「心配ではある！」

イヌ「良い奴か！」

イノ「うむ！良い奴かも！」

トリ「そこまでおさるさんを恨む理由があります？一月ちがうだけでしょ？」

イヌ「アンタも抜いて先についたでしょ？」

トリ「あら？これは失礼」

イノ「あはは！全くぶれないな！トリは！」

トリ「ありがとーございますー」

イヌ「なんでアンタはそんなにぶれる事が無い？」
トリ「ぶれる？ぶれるとは？？？」
イヌ「何と言うか…いっつもそうじゃん」
イノ「確かに！少し気持ち悪いな！」
トリ「気持ち悪い…ですか…んーなるほど？」
イヌ「そもそも…なんで喧嘩止める訳？意味無いし関係ないでしょ？」
トリ「死んでもいいからじゃないですか？」
イヌ「え？」
トリ「え？」
イノ「なるほどな！」
イヌ「え？本気なのそれ？」
トリ「ええ。私は熟しているのです。死んでも構いません。コケコッコー」
イヌ「それ…楽しいの？」
トリ「え？あのレースの合図で皆が起きた時からそうです」
イヌ「いやいや、そうじゃなくて…」
トリ「生に楽しいもつまらないもあります？全うし、熟し、死ぬ。それだけでは？？」
イノ「…トリ」
イヌ「お！イノシシ！言ってやれ！！」
イノ「お前…」
トリ「はい？」
イノ「カッコいいな！！」
イヌ「ばかやろーう！！」
イノ「馬鹿なのか！すまん！」
イヌ「はぁ…それでいいならいいけどさ…」
トリ「ええ。構いません。お二人が喧嘩するなら止める。それだけです」
イヌ「なんだそれ…永遠に仲良くならないじゃん」
トリ「する気がある方がどれだけいるのか疑問ですが？」
イヌ「それは…」
イノ「私はするけどな！あはは！！」
トリ「自分で何もコントロール出来ない者が相手にとやかく言えるものでは無いと思いますが？」

☆　黙るイヌ。意味わかってないイノシシ。

イノ「突き進めばいいのか！」
トリ「イノシシさんはそのままで良いと思いますー」
イノ「わかった！このままいる」
トリ「…あ、多分意味違いますね」
イノ「え！？そうなの！？」
トリ「そのままでいるは性格の話であって…そのまま立ち尽くすという事ではないです」
イノ「難しい！！」
トリ「あ…うん。わかりましたー。自分の月に帰らないのですか？という質問に変えます」

イノ「いつでも帰れる！心配だからな！皆が！！」
トリ「心配…？なぜ？？？」
イノ「なんとなく！！」
イヌ「…なんだそれ」
イノ「気持ちに理由をつけるのは意味が無いと思う！！」
釈迦「十月…今年の終わりに向かい、命が真っ赤に燃える」

＊ 今「１１月」

釈迦『『神無月』神が無くなる。各地から神が居なくなることから言われている。秋と冬の境目とした季節であることもある。十一月を『霜月（しもつき）』と呼び、『霜月』は文字通り霜が降る月の意味である。他に、『食物月（おしものづき）』の略であるとする『諸説…あり…』』
イヌ「そうね。理由なんて要らないんじゃない？」
イノ「だろう！」
イヌ「だからサルが許せない。忠義が無い…！」
イノ「なるほど！」
トリ「それは理由では？」
イノ「ん？そうか！」
イヌ「あいつは裏切った！共に行こうといったのに！」
トリ「犬猿の仲ってやつですねー」
イヌ「確かに…歩いている内…こいつには負けないって気持ちはあったよ」
イノ「ライバルだ！」
イヌ「…普通ならね」
トリ「というと？」
イヌ「覚えているよ。二人で川に落ちた時…あいつは私を落とした。でも必死につかんで二人とも川に落ちたのさ」
イノ「サルには聞いたのか！？」
イヌ「は？何を？」
イノ「何故落としたのか！？」
イヌ「聞く訳ないでしょ？結果が全て」
イノ「理由があったのではないか！？と思う！！」
トリ「理由あるとかないとか面倒くさいですねー」
イノ「それが生きる事では無いかと思う！すまん！」
イヌ「そう言えばさ」
トリ「はい？」
イヌ「なんでアンタ仲裁に入ったの？」
イノ「確かに！！トリなら理由が分かるのではないか！？」
トリ「…こけー」

イノ「ごまかすの下手だな！ま！いいか！あはは！！」
イヌ「…どうでもいいわ。サルは許せない、それだけ」
イノ「あ！聞きたい事がある！」
トリ「なんでしょ？」
イノ「皆はどうしてそんなに話す事を嫌うのだ！？」
イヌ「それは…」
トリ「成熟してないからでは？」
イノ「その成熟とはなんだ！？大人になると言う事か！？死んでもいいと言う事か！？分からん！」
イヌ「向き合えなくなるのも生きているからじゃない」
イノ「なるほど」

☆　背を向けるイノシシ。

イノ「…」
イヌ「…なにしてんの？」
イノ「こうすれば生きているのか！？」
トリ「そういう向き合うではないと思いますがー」
イノ「うん！これは非常に話しづらい！！生きた心地がしない！！あ！ちょうちょ！！」
イヌ「アンタと話してると頭おかしくなりそう」
イノ「それはすまん！！あはは！！」
トリ「とりあえず向き直りましょーねー」
イノ「それだ！」
トリ「はい？」
イノ「向き直ればいいのでは無いか！？イヌもトリも皆も！」
イヌ「嫌。忠義が無い者と話す事なんて無い」
イノ「それはそんなに大切なものか！？」
トリ「各々事情があるのでは？」
イノ「成熟か！？諦めているとしか思えないが！」
トリ「…」
イヌ「…」
イノ「あ！空気悪くなった！すまん！！謝る！！」

☆　横を向く。

イヌ「今度は何？」
イノ「半分になってみた！これなら共存できるのでは！？」
イヌ「もー…そういう事じゃないでしょ」
イノ「そうか！すまん！！」
イヌ「…もう手遅れ。バラバラなの。あのレースから…月がどうなろうと知った事じゃない」
イノ「手遅れか！じゃあ走ろう！！」

イヌ　「ウマとでも走れば？」
トリ　「そろそろ解散しますよー」
釈迦　「十一月…終わりを告げる準備。新たなスタートの助走」

＊　今「１２月」

イノ　「十二月とは！最後の月に当たり、３１日間ある。日本では、旧暦十二月を『師走（しわす）』、『師馳（しはす）』または『極月（きわまりづき・ごくげつ・ごくづき）』と呼んできた！というらしい！」
釈迦　『諸説あり』坊主が走るから…は有名だね」
トリ　「なんです？急に…」
イヌ　「びっくりするんだけど…」
イノ　「こうして一年が終わる！悲しく無いか！？」
イヌ　「何が…？」
トリ　「どういう事です？」
イノ　「今年は今年だ！もう終わる！冷めた一年は面白くない！！熱く！真っすぐ！貫くストレート！！それが一番だ！」
イヌ　「誰しもそうじゃないでしょ」
トリ　「そういう事ですねー」
イノ　「ぬ！？そういうものか！忙しいか！？」
イヌ　「さーね」
トリ　「では」

☆　離れるトリとイヌ。

イノ　「うーん…皆難しいな！！思う事など無いのに！さて！どうするか！？」

☆　沈黙。

イノ　「ん？あれ？？？」

☆　見回す。皆が入ってくる。

イノ　「何をしようと…してた？？？あはは！！！」
釈迦　『しはす』の語源は…もういいな」
イノ　「新たな一年に向け…忘れるんだな！」
釈迦　「忘年会とは分からなくなった人という種への警告なのかもしれない」
イノ　「忘れられるのは…寂しい事だなぁ…」

釈迦　「そして…イタチ…1日。正月に戻り」
イタチ「静かに…静かに過ごすんだ」
釈迦　「ネコの恨みが2日」
ネコ　「年神になれる！？本当！？ネズミ！」
ネズミ「うん…だから2日に来ると良いよ！」
ネコ　「2日かー！わかった！！」
ネズミ「ネコ」
ネコ　「なに？」
ネズミ「ごめんね」
ネコ　「なんで謝るのー？？教えてくれてありがとう！」
ネズミ「うん…じゃあ」
ネコ　「年神かー…いいなぁ…その月の代表になれるんだって…！！ね！皆！私がんばるから！！見ててね！」

☆　日が経つ。

ネコ　「よし！行くか！！応援しててね！もしかしたら…一月になるかも！！ふふふ！！」
釈迦　「…ネコ…」
ネコ　「私が一番かしら！？」
釈迦　「それは昨日の話だ…顔を…洗ってきなさい」
ネコ　「え？え？何？どういう事？？嘘？嘘だ…顔を洗う？？？洗えば覚める？？」

☆　顔を洗う。

釈迦　「…ネコが顔を洗うのはこれが色濃く残っているからと言われている」
ネコ　「ダメ…洗っても…洗っても洗っても！！あああああ！！！」

☆　騙されたことに気づく。

釈迦　「理解するのに三が日」
ネコ　「許さない…なんで…選ばれなかったの…ああああああああああああああ！！」

☆　雨が降る。バラバラな十二支。本を閉じる釈迦。

水天　「難しいものね。十二支…14の動物って言った方がいいかしら？」
釈迦　「…私が招いた結果だ」
水天　「あら？おふざけは無し？」
釈迦　「…」
水天　「ここで干支こそこそこそ話。甲（きのえ）、乙（きのと）、丙（ひのえ）、丁（ひのと）、戊（つちのえ）、己（つちのと）、庚（かのえ）、辛（かのと）、壬（みずのえ）、癸（みずのと）。なんかの漫画みたいだね」
釈迦　「…」

水天「はいはい…」
釈迦「贖罪なのかも知れない…だけど、繰り返すこの螺旋をいつの日か止めたい…って勝手だね！はは」
水天「勝手よ？」
釈迦「…」
水天「神はある種の職業。まだ発展途上で…学んでくべきだと、私は思うわ」
釈迦「許されるかな？」
水天「許されるし、許されない丁度いい存在なのよ、私達は。じゃあ思う通り足掻けば？」
釈迦「助かる」
水天「助かるも助からないも貴方次第じゃないの。神の教えは『投げかけ』よ」
釈迦「そうだなー…」
水天「さ。ここからが『諸説あり』！書けば？」
釈迦「…もう終わらない」
水天「もー書いてるんでしょ？？」

☆ 釈迦の本を奪う。

水天「さて…ここまで見て頂いた物語、少しだけ考察を入れお届けした十二支の物語です。この物語、非常に理不尽でいたずらな物語です。でも、その先、もしくはこうも考えられないか？ネズミは繁栄故の隠し事、ウシは乗せる事故の加担、トラは決断故の迷い、ウサギは成長故の拒絶、リュウは生活故の改革、ヘビは生死からの脱皮、ネコは素直さ故の恨み、イタチは思考故の遺棄、ウマは豊作故の停滞、ヒツジは安泰故の放棄、サルは知能故の不足、トリは成熟故の諦め、イヌは忠実が故の怒り、イノシシは真っすぐが故の忘却…それは現代に当てはまり、つづられる物語だとしたのなら？？ネズミは1番を狙った悪い奴…では無く、彼にも理由があったとしたのなら？？この物語は誰が何を思い、行動したのかが見える新たなレースになるとしたら？？？劇団ｆｏｏｌ番外公演！！新たな十二支の物語はこれより始まりでございます。愚かしく『諸説ある』…その一つ」

＊ 新たな1ページ「十二支」

☆ ネズミと釈迦が居る。

ネズミ「…」
釈迦「ん…どうしたんだ？ネズミ」
ネズミ「あの…聞きたい事があります」
釈迦「なんだい？」
ネズミ「何故…僕だけ記憶があるのですか？」
釈迦「…」
ネズミ「あの時…一番初めのレースからそう…そうだ！！なんで！僕にだけ！？」
釈迦「それは…」

ネズミ「なんです」
釈迦　「この物語の終わりに伝えるよ…今は…」
ネズミ「？？」
釈迦　「もう少し待ってくれ」

☆　集まっている皆。沈黙。

釈迦　「あれから…何が変わった？」
全員　「…」
釈迦　「何も変わってないと思うのは私だけか？」
全員　「…」
釈迦　「…もういい」

☆　バリア解除。

ネズミ「え？」
釈迦　「十二支はここで終わりだ。代表としての役割を果たせないなら…終わるしかない」
トラ　「でも！」
釈迦　「追い詰められたら言い訳に走るのはなんだ？役目を果たさない月になんの意味がある？温度は上がる、涼しい時期にも拘わらず前の月のようになる、雨は降り続ける、日照はバラバラ…せめてもの救いで『仲良くなれ』と言った。だが結果はなんだ？役目を果たさず己の道を行くならもう好きにすればいい。私はこんな事の為に十二支を選んだのではない」
全員　「…」
釈迦　「題を出す。１２００００キロ先に『協力』してこれを持って来る事。期限は１２日…」

☆　水天、タスキを出す。

ウサギ「はい！」
釈迦　「なんだ？」
ウサギ「十二支が終わったらどうするのですか？」
釈迦　「定まるものがない。崩壊のみ」
ヘビ　「シシシ…神様はそれでいいのかね？？」
釈迦　「憎み合い、戦うくらいなら自ら崩した方がましだ」
トリ　「ごもっともー」
釈迦　「では、皆の行動を期待する」

☆　二人。

水天　「はーい、お疲れ様」
釈迦　「はぁ…」

水天「そんなに悩むならズバッ！と言えばいいんじゃない？あの事」
釈迦「それではダメだ。考え、悩み、乗り越え、答えを出さないと後世に伝わらない…何より」
水天「ん？」
釈迦「恐怖じゃ…本当の協力なんてできない」
水天「そーね」
釈迦「自分で言い出した事だからね」
水天「神様もお悩みねー」
釈迦「だから待ちたい」
水天「そ。じゃ、ごゆっくりー」
釈迦「水天」
水天「なーに？」
釈迦「上手くやれるかな」
水天「学び中なんでしょ？神様『たち』もね」
釈迦「…」
水天「神もあくまで種属なんだから…思う通りに」
釈迦「…ありがとう」
水天「でも、なんで１２００００キロ？」
釈迦「星座も１２、使徒も１２、神も１２、苦行も１２、礼服も１２、１日は２４時間、これを２等分すると午前と午後。３等分すると…」
水天「はいはい『諸説あり』…あはは、生きる数？」
釈迦「とるなよー」

☆　黙っている十二支、ネコ、イタチ。

ネズミ「あ…の」
ウシ「崩壊か」
トラ「どうしましょう…」
ウサギ「んー強制的に死ぬのは発展ではありませんねー」
リュウ「神に委ねればいずれこうなる運命」
ヘビ「シシシ…また生き返ればいいさ」
ウマ「中々上手く生きていたけどなー！」
ネズミ「あのさ…」
ヒツジ「楽に…やっと楽に」
サル「凛々しく行こう！終わりに向けて！！」
トリ「期は熟しましたー」
イヌ「知るか…サル…アンタだけはコロス！」
イノ「うーん！」
イタチ「…もう遅い話だ」
ネコ「諦めて次の動物にまかせればー？？」

☆　そっぽを向く皆。

ネズミ「あのさ！！！聞いて！！」
リュウ「なんだ？」
ヘビ　「卑怯なネズミ。嫌いではない」
ネズミ「も、もう一度…走らない？一緒に」

☆　聞いていない皆。

トラ　「ネズミ…！ちょっと皆！聞いてみましょ？」
ウシ　「おう！聞いてみる！！」
トリ　「もう一度？それに何の意味が？」
サル　「…」
イヌ　「どうしたのよ？サル？死ぬ覚悟が無くなった？」
ウサギ「開発開発…新たな知識？」
ヒツジ「走るのは嫌」
ウマ　「走る事はいい事だ！」
ネコ　「下らない」
イタチ「…下らないのはこうして集まっている事では？」

☆　全く聞く耳を持たない。

ネズミ「あ…え…と」
イノ　「ぬー！！！！！」

☆　地面に頭を叩きつけるイノシシ。

イノ　「一度落ち着け！なぜなら！！聞き取れん！！」
ウシ　「そこ？」
イノ　「ネズミ！！」
ネズミ「な、何？」
イノ　「血が上っている時は見えないものだ！明日にしよう！！」
ネズミ「う、うん…でも…」
全員　「多分見えてないの…血だと思う」

☆　頭を触る。

イノ　「お！？そういう事か！あはは！そりゃ見えない！ではまたな！あはは！」
リュウ「あいつ大丈夫か？」
ウマ　「今更でしょ」
ウサギ「でも…言う通り。今は一旦解散しましょう。意識が別々過ぎる」

☆　別々になる。

ウシ　「ネズミ」
ネズミ「だ、大丈夫…明日…話す、ちゃんと」
ウシ　「うん！気合だ！じゃあな！」
トラ　「…」
ウシ　「お前も。今は考えるだけにしよ」
トラ　「そうですね。決断出来ない状況です」
ネコ　「ネズミ」
ネズミ「は！？ネコ！」
ネコ　「…話がある」
ネズミ「うん…何？」
ネコ　「なんでだましたの」
ネズミ「え…と」
ネコ　「…じゃない…あーもー…！！ごめん」
ネズミ「え？」
ネコ　「聞く耳を持ってなかった」
ネズミ「い、いやいや！いいよ…僕の方こそ」
ネコ　「素直に聞く。正直に話して…そうしたら…」

☆　ネズミが伝える。

ウシ　「仲良く…出来ればいいけどな」
トラ　「上手く行かない」
ウサギ「言葉は伝わりにくい」
リュウ「だから自分だけになればいい」
ヘビ　「そうしたら」
上半期「揉め事は起こらない」
ウマ　「それでも寂しい」
ヒツジ「寂しいのは嫌いなくせに」
サル　「一人になろうとする」
トリ　「一人で死ぬことを選びたがる」
イヌ　「それは辛い事とわかって」
イノ　「その選択をする」
下半期「生きるという葛藤に負ける」
ウシ　「世界はよく投げかける」
トラ　「自分で死を選ぶのは」
ウサギ「悪い事だと」
リュウ「でも」
ヘビ　「それで助かる人もいる」
ウマ　「生きる者は正しく」
ヒツジ「死ぬ者を悪だとする」
サル　「話してくれよ」

トリ　「話してくれればよかったのに」
イヌ　「言えないから」
イノ　「選ぶ」
全員　「死という現実」
ウシ　「苦しい」
トラ　「悩む」
ウサギ「助けて」
リュウ「叫びたい」
ヘビ　「わかって欲しい」
ウマ　「困る」
ヒツジ「必死なのに」
サル　「理解する気なんて」
トリ　「無い癖に」
イヌ　「そう決めつけて」
イノ　「思い込んで」
全員　「バイバイ…」

☆ ウシ。

ウシ　「生きるってのは大変だなぁ…理解はしてるけど…実はもっと大変だよな…動物ってのは選べない。仲間は家畜として扱われ、タイミングで殺され、食卓に並ぶ…『頂きます』。それすらやめている人間の為に頑張る??こんな事を考えるから…はぁ…だから決めるのを辞めた。乗せてやりゃいい。この背中に誰かの荷物を背負う事が出来たならそれでいい」

☆ トラ。

トラ　「…決断する事。才覚がある。トラはその象徴。でも…考えれば考える程曖昧になって行く自分がいる。小さい頃は覚えていない。きっと人という種に狩られた親が居るのだろう。…耳元で誰かがささやく『それでいいのか』『それが正しいのか』って…その声がするたび…曖昧になって行く…この声を誰か消して」

☆ ウサギ。

ウサギ「(鼻唄) …ん?あ、こういう時間いいので次で」

☆ リュウ。

リュウ「4番マジか?」
ウサギ「はーい」
リュウ「あー…天に昇れば…いやいやいや、やりづら!」
ウサギ「あ。ちょっと手伝ってくれますー?」

リュウ「亢竜悔いあり…亢竜になるまで上りつめる。その景色はいかほどか？」
ウサギ「早くー」
リュウ「はぁ…なんだ？」

☆ ヘビ。

ヘビ 「シシシ…悩んでるねぇ…脱皮すればいいんだよ。一度死んで復元すればいいのさ…進歩でも進化でもない…死を乗り越えた先の世界。…出来ない者は淘汰される…蛇行しながら進めばいい。誰しも悩んでる？自分の皮をはげば新しい世界さ…シシシ」

☆ ウマ。

ウマ 「健康で！豊作！それでいいんだけどなぁ…走ればいい！遠く遠く！自然を！…でも、たまに思う。この先の景色を見れない自分はなんだろうって。走っても走ってもいけないなら囲いの中で生きるしかないじゃん…」

☆ ヒツジ

ヒツジ「安泰すると…死にたくなる…楽しい事が無くなるから…楽しい事ってなんだと思う？？上を見て頑張っている時だと思う…たどり着いたそこは…！…何も無い…満足も充実も…失われる」

☆ サル。

サル 「背筋を伸ばして！真っすぐ！それだけ！…知らない事は知らなくていい…知恵が回るものは先手を打つか…我慢し続けるか…？そんなもの。皆はどっち？？」

☆ トリ。

トリ 「成熟したら最後！！後はもう一歩！死ですね！熟せばその先は無い…その考えは間違っている？おやおやおや？十人十色という言葉がありますが？自分は当てはまらない、もしくは？そんな人間はいない？？それはカン違いでは？」

☆ イヌ。

イヌ 「ライバルがいる。親友はひっくり返れば一番憎くなる。よくあるでしょ？憎いと好きは紙一重。紙が破れたら？？自分をよく知っている、相手をよく知っている、それが親友、ライバル、そして、仇敵…憎むことを選んだ先は？どこ…」

☆ イノシシ。

イノ　「…今日も…イケてる！！自分！よし！！自撮り！！！おはよう世界！難しい事考えてもしょうがない！真っすぐ楽しく生きるのみ！大変なのはいつも一緒！猪突猛進！！！」
上半期「貴方は？」
下半期「どれ？それとも」
上半期「違うなにか？？」
全員　「考え方も生き方も十人十色」
ネズミ「だから…理解しあうのが大事なんだと思います」

☆　向き合っている。

＊　新たな２ページ「輪廻」

ヘビ　「理解しあう？」
ヒツジ「してるんじゃない…」
サル　「背筋よく！」
ネズミ「ええ…してると思います…少しだけ…だからこうなった。あいつはああだから…こいつはこうだからと分けて…知っているフリをした…」
ネコ　「…」
トリ　「それを貴方が言います？」
イヌ　「裏切ったんでしょ？ネコちゃんもウシも」
トラ　「ちょっと…！」
ウシ　「やめとけ」
ウマ　「まずそこの説明ないとなぁ…一番だし」
ネズミ「…それ…は…」
ウサギ「言えないなら研究できませんね」
リュウ「振り出しだ」
ヒツジ「１日…無駄にした…」
イノ　「ぬー！！！！！」

☆　地面に頭をぶつける。

イノ　「言い出せるまで待つ！！」
ネズミ「え？」
イノ　「いつもそうだ！皆ネズミを裏切った奴として聞こうとしない！いつも何か言いたげだ！気の所為かもだけど！すまん！！」
イタチ「聞きたいね。こちらとしても」
イノ　「そう！聞いてから考えればいいと思うぞ！あはは！！」
ウシ　「あー…ま、言いたい事はイノシシが言ってくれたが…もう少し落ち着いた方がいい。崩壊なんて実感ないかもしれないが…結構、気合で何ともできないぜ？」
トラ　「ネズミ…」

トリ　「しかしですねー」

☆　またもめる。

ネコ　「あー！もー！！うるさい！！！馬鹿じゃないの！？代表なんでしょ！？アンタ達！！ここにいるイタチや私はなんなのよ！？望んでも！！入れなかった動物たちは沢山いるの！なのに…！！！恥ずかしくないの！？ぐちゃぐちゃ言って諦めて！嫌だ嫌だ言うならとっとと死ね！！！」

☆　沈黙。

ネコ　「…ごめん。死ねは…言いすぎた…ごめんなさい」

☆　黙って聞く姿勢になる。

ネズミ「ありがとう…皆…ネコ」

☆　呼吸を整えるネズミ。

ネズミ「神さま…ごめんなさい。言います…僕たちは…何度も繰り返しているんだ。そして、その度に悪化している」

リュウ「…は？」

イヌ　「どういう事？」

ネズミ「…十二年で僕らはリセットされて…また背負う事になる。最初は良かった…でも…何度も繰り返している内に…螺旋の中で…諦めるという事を知ってしまった」

トラ　「…話が」

トリ　「飛躍しすぎて分かりませんなー」

ネズミ「輪廻って呼ばれる…この言葉は知っているでしょ？」

ウサギ「死んでまた生まれ変わる事―ですね」

ネズミ「それが僕たち十二支だ。何度も繰り返して…終わる…今年がその終わり」

サル　「はい！ネズミはなんでそんな事を知っているのか！」

ネズミ「子孫繁栄の象徴。ネズミには伝えられるんだ。だから…一番を取り続ける運命にある」

☆　沈黙。

ヒツジ「え…？じゃあ今年で私達終わるの？」

ヘビ　「おやおや…」

ネズミ「そういう事です…」

ヒツジ「い…いやいやいや！レース参加したし！それで！！それで…」

ネズミ「僕がやる事は…ウシに手伝ってもらって何としても1位を取る事…ネコを騙す事…悪戯をし…順位をいじる事」

リュウ「何故そんな事をする必要が？」
ネズミ「十二年を…共に過ごし、より次を良い年にする為…です」

☆　沈黙。

ネズミ「なんで！！なんで忘れてるんだよ！？」
全員　「…？」
ネズミ「思い出してよ…！この螺旋を思い出してよ！ウシ！君は！逞しい背中で皆を引っ張ったんだ！かっこいいのになんで今はそんな受け身なんだよ！トラ！！君はもっとすごいんだ！！誰もが君のカッコいい姿に憧れたんだよ！本当は一番になれたのに！なんで今は惑わされてるんだ！！ウサギ！思い出して！なんで人間の言葉を覚えてるの！？頭がいいんじゃないか！どっかで覚えてるんだよ！かっこいいんだよ！！リュウ！！なんで空に憧れるのさ！飛べるんだよ！君は飛べるんだよ！！高く昇るその姿が！！かっこいいんだよ！ヘビ！！どうして…どうして生きる事も死ぬ事も興味がないのさ！少しずつでも進んだの！人より遅いかもしれないけど進んだんだ！かっこいいじゃん！！ウマ！！走る君の姿に…皆自由を感じたんじゃなかったのかよ…！なんで…熱くなれないんだ！！誰よりも自由で囲いなんて壊せるんだよ！！ヒツジ！安泰の何が悪いんだ！頑張ったから安泰したんだ！なんで忘れてんだよ！安泰の為に頑張ったんだろ！？かっけーじゃんよ！！サル！！どうしてイヌに言ってやらないんだよ！？頭いいじゃん！すげぇんだってそれ！ごまかさないで…！そのカッコいい所見せてくれよ！トリ！成熟なんていいんだよ！もうとっくに立派なの！君がスタートなんだ！簡単に死ぬとか言うなよ！かっこいいんだからさ！スタートきれるじゃんかぁ！！イヌ！！忠義ってすげぇんだって！！！一生懸命守るって大変な事をやってんだって！！恨まないでさ！君の素敵な所！！見せてよ！一つを守るってかっこいいんだよ！イノシシ！！真っすぐすすむってすごいじゃん！惑わされないですすむんだ！！忘れる事をいつ覚えたんだよ！そんなもん跳ねのけて一直線に進むのが君だろ！カッコいいじゃん！！！イタチ…！！君は助けたんだ！何年も何年も何年も！！自分が入れたはずなのに！！見て納得したんだ！すごいよ…！出来ないよ…！そんな事…カッコいいじゃん！！ネコ！！！君を巻き込みたくない！なんでかって！僕を追いかけるのは君なんだ！！君もイタチもこんな所に入っちゃダメなんだ！悪いネズミをやっつけるヒーローであってくれよ！！！カッコいいんだから」

☆　各々の反応で立ち尽くす。

ネズミ「僕は…いま…神さまとの約束を破った…もう…仲間になれない…！でも…何と言われようと構わない…！！！思い出してよ！皆」
釈迦　「すまない…」
ネズミ「滅茶苦茶…カッコいいんだ…！！」

☆　不甲斐ない自分に泣きながら頭を抱える。

ネズミ「ダサいのは…僕だけだ…！！！」
全員「…！」
ネズミ「ごめんなさい…一人でも神さまの所に行きます…ごめんなさい」

☆ ネズミが去る。追いかけるトラ。沈黙している皆…頬を叩き真ん中に座るトラ。

トラ「やろう、皆！」
全員「…」
ウマ「え？いや本気！？」
トラ「カッコいいって言われたんだ！だから…！やろう！皆！」

☆ 感化される皆。

ウサギ「最短距離を出す。リュウ」
リュウ「はぁ…この為か」
ウマ「信じるのか…信じるのか！？今の話！！」
ウシ「信じるか信じないか最早どうでもいい」
ウサギ「トリ、手伝って」
トリ「コケ―。了解」
ヒツジ「ど、どうかしてない？皆…」
サル「…ネズミは頑張った。それに応える」
ヒツジ「え？」
イヌ「…どいて」
ウマ「お、おい」
ヘビ「シシシ…これ…違うよ？」
ウサギ「これは意外な」
ヘビ「ここはこう行った方が間に合う…シシシ」
ヒツジ「無理…無理だって！？」
イノ「それでも…距離があっても思いは届くそうじゃないか？」
ウマ「…なんだそれ」
イノ「言ってみた！いいぞー！混ぜろー！！！」
ウマ「行った所でどうか分からないし…」
ヒツジ「うん」
イタチ「ついたち…その名前は嫌いだ。しかし…」
ウマ「…」
イタチ「行ってみないと分からなかった」

☆ イタチが去る。

ヒツジ「…分からない」
ウシ「分からないものにぶつかる…ね」
ネコ「一発殴ればいいんじゃない？神さまっての」

ウシ　「だな！」
トラ　「ウマ！ヒツジ！…皆、あのね！」

☆　集まって話をしている皆。

釈迦　「申し訳ありません。お話があります」

☆　誰かと話している釈迦。夜が更けていく。靄の中去って行き、ネズミだけが残る。

＊　新たな３ページ「リレー上半期」

ネズミ「誰も…居ないか…そりゃそうだよね」

☆　準備体操する。

ネズミ「あんなの…急に言われて…どうなるかもわからないのに…１２００００キロ走る
　なんて…意味あるかわからないもんね…」

☆　頬を叩く。

ネズミ「よし！…行くか！！」
ネコ　「何が行くか！よ」
ネズミ「ネコ！なんで？？」
ネコ　「さぁ？私も走るからじゃない？」
ネズミ「え！？ネコも！？」
ネコ　「まぁ…なによ？文句ある？」
ネズミ「いや…ないけど…」
ネコ　「あ、あとね。あんたが最初じゃないから」
ネズミ「え？」

☆　イタチが来る。

ネズミ「イタチ…」
イタチ「お前より先なんだ」
ネズミ「え？」
イタチ「ついたちは俺の仕事だ」
ネズミ「それ…なに？」

☆　タスキがかかっている。

イタチ「これか？…これはな」

☆　全員出てくる。

ウサギ「あーいいですか？」
トラ　「これは『繋ぐ』レースである！！！」
全員　「おう！！」
ウサギ「最短距離をベストで走り抜け！配置ポイントへは自分の体形に合わせて道を選んで
　　構わない！遠い者は今からスタートしてくれ！協力、繋いでタスキを渡さなければ
　　ならないというルールを忘れないように！」
全員　「おう！！」
ウサギ「１４人でも１２００００キロなんて馬鹿げた距離は不可能」
トラ　「だからこそチームで走る！」
ウサギ「受け取ったものは体力を考えず全力疾走！」
トラ　「そしてすぐに休む！交代でね！」
トリ　「タスキー」
ウサギ「これを渡されたものが次の走者！！」
サル　「その走者は？」
ヘビ　「次の待機場所まで移動し、待機という事さ…シシシ」
ウマ　「走っている奴の先を越すんだったらゴールすれば？」
ヒツジ「それが全員で協力しなきゃって事…なんだよね？？」
ウサギ「その通り。で、運ぶのはリュウ！…負担をかける故の発明は」
トリ　「給水機―」
全員　「おおお！！」
イヌ　「リュウは大丈夫なの？」
リュウ「問題ない」
トラ　「先にウシが向かっている！さ！皆、やるぞー！！」
イノ　「まっしぐら！」
全員　「おー！！！！」

☆　消える皆。

ネズミ「皆…」
イタチ「感傷に浸る暇はない。残り１０日を切っている」
ネコ　「そういう事。何があるかわからないゴール。それを楽しみにしてるのよ」
ネズミ「何があるかわからないゴール…」
イタチ「では…」
ネコ　「スタート！！！」

☆　イタチが一人猛ダッシュ。

イタチ「うおおおおおおおおおお！！！！」

☆　イタチ、スロー。

イタチ「…恨んでいた。世の言葉を…蔑む者を…！でも！本当の自分は違う！！それだけで傷つく？ああ、そうさ。この世界は何気ない言葉で死に至らしめる事もある…でも！！まだ！！生きている！！」

☆　解除。

イタチ「俺が！！1位なんだ！！！何と言われようとこのタスキ！！守る！！ああああああああああああああああああああああああああ！！！」
ネズミ「イタチ！！」
イタチ「なぁ！！そうだろ！？偽りの一番！！！」

☆　タスキを渡す。

ネズミ「受け取った！ありがとう！！！」
イタチ「ああ…お前達が憎かったのに…今は」

☆　離れていくネズミ。

イタチ「愛おしく…感じるよ」
ネコ　「休みな」
イタチ「いーや？」
ネコ　「は？」
イタチ「ついたちは…毎月来るだろ！運べ――！！！」

☆　ネズミが走る。

ネズミ「はぁ…はぁ…はぁ…」

☆　ネズミ、スロー。

ネズミ「…キツイ…でも、これをウシの背中に任せてたんだ…まだ…まだやれる…一月のネズミは終り…！！でも…大きなものがいつも勝つんじゃない！！誰でも…がんばれるんだ！！勝てるんだ！」

☆　解除。

ネズミ「ウシぃいいいいいいいいいいいいいいい！！！！」

☆　現れるウシ。

ウシ　「もうお前を背負わないぞ？」
ネズミ「はは…！大丈夫！！」
ウシ　「うおおおおおおおお！！！！」

☆　猛ダッシュのウシ。

ウシ　「いい！！先に居る事は！！託されるという事！！」

☆　ウシ、スロー。

ウシ　「すまない。ネズミ。俺が加担したばかりに辛い思いをさせた…でも…！！もう！！
　　違う！見てろ！！！」

☆　解除。

トラ　「ウシ！！渡して！！」
ウシ　「なめるなぁあああああああああああ！！！」
トラ　「ウシ！！ウシ！！！」
ウシ　「まだまだ走れる…！どうだ…？かっけぇだろ？？？」

☆　猛ダッシュ。

リュウ「ウシは？」
トラ　「次に運んで！」
リュウ「は？」
トラ　「いいから！！！」
ウシ　「ああああああああああああ！！！」

☆　ふらつく。

ウシ　「まだだ…まだだろ…ネズミの…想い」

☆　トラが抱える。

ウシ　「どうだ？かっけぇだろ」
トラ　「残念。私の方がかっこいい」
ウシ　「おう…頼むわ」
トラ　「おい！！皆！！私はトラぁあ！！この背中に！！着いてこい！！！」
全員　「おう！！！！！」
ウシ　「あはは…」

☆　猛ダッシュ。

トラ　「あああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

☆　トラ、スロー。

トラ　「支える背中が…なんて小さい…下らない事に耳を傾けるなら…皆の声を聞けばよかった…それだけなのに…声はもう聞こえない…これが決断！！」

☆　解除。

リュウ「…これは不味い」
ネコ　「なんで」
リュウ「冷静さに欠ける」
イタチ「それは…いい」
リュウ「は？」
イタチ「何処までも走れ」
ネズミ「トラ！」
トラ　「なめるなぁあああああああ！！！！！！！」
ウサギ「あら？予想以上」
トラ　「ウサギぃいいい！！！」
ウサギ「はいはい」

☆　タスキを渡す。

トラ　「頼んだ！」
ウサギ「はーい」

☆　立ち止まるウサギ。

ウサギ「こういう展開になると思うから開発と発明ですね。よいしょ」
リュウ「あいつ…」
ウサギ「繋ぐなら…これが一番！！」

☆　滅茶苦茶ジャンプする。

全員　「えええええええ！」
ウサギ「はぁ…きっとサボっていると思うんでしょ？これはですねー…うぐ…」

☆　痛みが尋常じゃない。

ウサギ「筋肉が…切れる…痛い…想像以上に…」

☆　上空から見る。

ウサギ「…ああ…良い景色だ…痛みなど忘れるくらい…向上、発展の先にしか」

☆　着地する。内臓が破裂するほどの痛み。血を吐く。

ウサギ「味わえない…！！！！」
リュウ「大丈夫か？」
ウサギ「まぁまぁ？」
リュウ「偶には苦しいと言え」
ウサギ「お互い…様で」
リュウ「血と汗のタスキ…受け取った」
ウサギ「どうも」
ネコ　「飛べ！！」
全員　「リュウー！！！」
リュウ「言われなくても…！！」

☆　リュウが飛び立つ。

ネズミ「この先は僕が運ぶ？無理だって！血が…」
ウサギ「え？これ？ケチャップですけど」
全員　「てめぇえええ！！」
ウサギ「あはは…」
ネズミ「待って…」
ウサギ「ネズミ」
ネズミ「？」
ウサギ「しー」
ネズミ「…はい」

☆　リュウが飛び続ける。

リュウ「…ああ…何故飛んでいるんだろう？何の意味があるのか？」

☆　ただただ静かな空。

リュウ「このまま…消えてしまえば…いいのに…」

☆　声が聞こえる。それは届くかもわからない応援。

リュウ「ああ…うるさい…うるさい！！何だと思ってる！？龍だぞ？舐めるな…神よ！！
　見ているならこのリレーを語るがいい！！お前より上を行く！！この瞬間！この
　時は…！！この世界の…覇者である！」

ヘビ　「シシシ…効率が良くないねぇ？上手くやれるすべがあるだろうに」
リュウ「言うなら示せ」
ヘビ　「残念…こっちは蛇行さ」
ネズミ「リュウ！」
ウシ　「大丈夫か？」
リュウ「ウサギ！！！」
ウサギ「はい」
リュウ「給水機―！」
ウサギ「はい」
トラ　「いっけー！！ヘビー！！！！」
ヘビ　「はいはい」

☆　静かになる。

ヘビ　「…熱くなってまぁ…知るか…シシシ」

☆　立ち止まる。

ヘビ　「これ…逃げたらどうなるのかねぇ？知らないだろう？？それも…」

☆　沈黙。スロー。

ヘビ　「あれ？」

☆　皆が待っている。

ヘビ　「なんで…進んでるんだ？？別にこんな事…する必要無いのに？？待ってる？
　　進んだ？」

☆　皆が応援している。

ヘビ　「頭がおかしくなったのか？？？なんで」
ウマ　「任せろ！！！」
ヘビ　「笑顔で…送ってるんだ…なんで…泣いているんだ…」
ウマ　「行くぞー！！！」
ヘビ　「あああ…ああああああああああああ」

☆　ヘビを皆で抱きかかえる。

ウマ　「ヘビ…知らないだろう！それってな！燃えてるんだ！この状況に！！」

☆　ダッシュ。

ウマ　「あはははは！！今おれは！！自由だ！！！」

☆　立ち止まる。

ウマ　「あれ？…どういう事？」
トラ　「ウマが止まってる」
ウシ　「何してんだ！」
ヘビ　「シシシ…戸惑い？」
ネズミ「いや…多分違うと思う」
ネコ　「どういう事」
イタチ「思いがあるのだろう」
ウサギ「まぁ…ね」
リュウ「あんまり喋るな…キツイ」
ウマ　「ああ…そうか」

☆　空を見上げる。

ウマ　「自由じゃ…なかったのか…豊作も健康も…全部…！！自由とは…！」

☆　大きく息をする。

ウマ　「いつでもない…『今』だ！！！」

☆　全力ダッシュ。

ウマ　「うおらぁあああああああ！！！！！！！！！！！」

ネズミ「速い！！」
リュウ「追いつく…！」

☆　ウマ、スロー。

ウマ　「簡単な事だ…！簡単な事だったんだ！囲いなんて…無かった！作ったのは…
　　自分だ！！！」

☆　解除。

ウマ　「はっはー！！！たのしいぜえええええ！！！！！」
トラ　「ヒツジはまだ先…！」
イタチ「このペース…行けるか？」
ウマ　「俺は！！今！！！囲いの外だぁあああああ！！！！」

水天　「残りも少ないわよ…いけるかしら」
ウマ　「なめるなぁあああああ！！！！」

＊　新たな４ページ「リレー下半期」

水天　「リレーは下半期へ」
ウマ　「おおおおお！！ヒツジー！！！」
ヒツジ「…大丈夫…大丈夫」
ウマ　「受け取れぇえええ！！！」
ヒツジ「うん！」

☆　ウマが見送る。

ウマ　「はぁ…はぁ…良いな…空も大地も…どこまでも広い…ちっぽけだな…俺は。あはは」

☆　ヒツジが走る。

ヒツジ「はぁ…はぁ…苦しい…苦しい…！！なんで…こんなに苦しい…皆…なんで」

☆　転ぶ。

ネズミ「ヒツジ！！」
ヒツジ「痛い…痛い…辛い…もう嫌だ…諦めよう…こんな事…皆居たから走れたんだよ…
　一人でなんて…走れない…消えちゃう、忘れちゃうかもしれないのに！頑張れない」

☆　タスキを取る。

ネコ　「あの子！」
トラ　「待って！」
全員　「え？」

☆　投げようとする。…が。

ヒツジ「…汗…皆の…居る…居るんだよ…なんで」

☆　立ち上がる。

ヒツジ「こんな所で…諦めようとしてるんだ…安泰はこの先にある」

☆　足を引きずり走る。

ヒツジ「今どのくらい？…もう視界がぼやけてきた…痛い…苦しい…でも…」
サル　「ヒツジぃいいいいいい！！！！！！！」
ヒツジ「待っている！！家族が居る！！！！」
サル　「受け取った！！よく頑張ったな！」

☆　サルが走り出す。

ヒツジ「…ああ。いいなぁ…誰かの背中ってかっこいいもんだなぁ…」
リュウ「乗れ」
ウシ　「立てるか？」
ヒツジ「立てる…」
ヘビ　「リュウ。無理するな」
リュウ「無理？しているのは皆同じだ、種が違うだけ役割があるだけ」
ウサギ「ほうほう」
全員　「かっこいーー！」
リュウ「ああもう！行くぞ！」

☆　サルが走っている。

サル　「まっすぐ！いつでも背筋よく！真っすぐ！！！」

☆　その先のイヌ。

イヌ　「…ここが中継地点。先に進んで待つって…だったら一人でやればいいのに…協力…か。そもそも、あのタスキって奴を運ばないといけないなら…いや…なんにしても一人は無理か…予定だと今はリュウくらい？」

☆　道を見る。

イヌ　「馬鹿みたいだな。何を待っている…無駄だ…届けても何もないじゃないか」
サル　「イヌ…イヌ！！今度はお前に託す！！待っていろ」
イヌ　「意味無い…」
サル　「うあああああ！！」
イヌ　「待ってても…」
サル　「何が何でも！！！走りぬく！！！」
イヌ　「サル…？」

☆　走り出すイヌ。

サル　「え…」

☆　橋が現れる。

ウマ　「サルー！どうしたー！！！」
サル　「…」
ウサギ「止まっている…まさか」
ウシ　「トラウマ？」
トラ　「え？」
ウマ　「呼んだ？？」
ウシ　「えーと…違う」
ネズミ「サル！大丈夫だよ！！」
サル　「皆が応援している…そうだ…大丈夫…今回は一人だ」

☆　ゆっくり渡る。

サル　「焦らない…！焦らない…！！落ちない…誰も！！」
リュウ「いかん」
ヘビ　「サル！早く抜けな！！」
サル　「大丈夫…ダイジョウ…」

☆　踏み外す。

サル　「あ…」

☆　スローに見える。

サル　「そう…これは報いか…イヌ…あの時…助けたかったんだ…崩れたのが見えたから…君に手を伸ばした…つかみ損ねた手は…知能では無かった…力の不足だ…ごめん…みんな」

☆　イヌが食いつく。

全員　「え？」
ネコ　「イヌ…！」
イタチ「なんで…」
リュウ「ここに居る！」
イヌ　「ふざけないでよ…！！ここで落ちるとか！！！ぶち殺すぞー！！」

☆　サルを戻す。

サル　「どうして…！」
イヌ　「どうしてじゃない…！！馬鹿！アンタはアタシの親友だろうがぁ！！こんな所で！！諦めてるんじゃない！！走れ！早く！！それで…それで！！アタシに持ってこーい！！！」

サル　「…！！」
トリ　「はい。タスキ」
ヘビ　「シシシ…トリまで？」
ウシ　「大丈夫！」
トラ　「行ける！」
全員　「はしれー！」
トリ　「犬猿は終わりですね。では」

☆　トリが居なくなる。

サル　「イヌ…」
イヌ　「何？」
サル　「一番に持ってってやる！」
イヌ　「次はトリでしょ？」
サル　「うあああああ！！！」
イヌ　「負けるか…！」

☆　イヌも居なくなる。

サル　「知恵だけじゃない！ウマ！イノシシ！見て！！鍛えたんだ！もう…手放さないように…行け！行け！！」
ウマ　「サル…」

☆　トリ。

トリ　「んー…無駄に走ってしまいましたが…まぁいいでしょ…それにしても…ふふふ、いいですね。親友とは…」
サル　「トリぃいいい！！！」
トリ　「はいはい」
サル　「任せたぁあああ！！！」
トリ　「ええ」

☆　タスキを渡す。

サル　「トリ…イヌ…ありがとう」

☆　自分のペースで走るトリ。

ネコ　「なんか…」
イタチ「余裕だな」
ネズミ「き、きっと考えが！」
トラ　「あるはず」

ウシ　「ウサギ。どう思う？」
ウサギ「…乱れが無いですね」
ヒツジ「いい事なの？」
ヘビ　「荒くなってないのさ」
リュウ「どういうつもりかはわからないがな」
トリ　「はぁ…皆様。心配しているんで居るんでしょうねぇ…やだやだ。もう少し…うん、ここですね」

☆　止まる。思い出す…

ネズミ「トリ！成熟なんていいんだよ！もうとっくに立派なの！君がスタートなんだ！！簡単に死ぬとか言うなよ！かっこいいんだからさ！スタートきれるじゃんかぁ！」
トリ　「あんな事言われて…黙っていられるほど…成熟してませんよ…！！！」

☆　猛ダッシュ。

全員　「はや！！」
トリ　「…楽だったんです。きっとね。それを自分で理解していながら達観を貫いた…なんて情けない…でも…思いますよ？達観してた事は良かったと」

☆　イヌが見える。

トリ　「だってね…こうして」

☆　タスキを渡す。

トリ　「笑顔で…次に託せる仲間に出会えたんだから」
イヌ　「行って来る」
トリ　「いってらっしゃい」

☆　イヌが走り出す。

ネズミ「…まだ死にたい？」
トリ　「死にたいとは失礼な。生きたいから」

☆　微笑むトリ。

トリ　「笑えるのでは？」

☆　イヌが走る。

イヌ　「まだまだ…走れる…！走る事は…大好きだから…！！皆」

☆　空を見上げる。リュウが飛んでいる。

イヌ　「…暖かいな。同じ道を行ける仲間って」

☆　痛みが走る。

イヌ　「痛…」
サル　「あれ？」
リュウ「なんだ？」
サル　「イヌの様子が…変だ」
全員　「え…？」
イヌ　「あー…サルを助けた時か…無理に引っ張ったから…でも…走れる…走れるよ」
トラ　「止めた方がよくないですか？」
ネズミ「僕が変わる…」
サル　「イヌ！！行けるよ！！！」
ヘビ　「おいおい」
サル　「そうだろ！？イヌ！！」
イヌ　「うるさいなぁ…行けるに決まってるでしょ…」

☆　走り続けるイヌ。

イヌ　「例え…ちぎれたって…守る忠義がある…！その忠義は…！！うあああああ！！！」

☆　イノシシが待っている。

イノ　「ぬ」
イヌ　「任せた」
イノ　「…何も言わん！頑張ったな！！」
イヌ　「…」

☆　イノシシの背中を見守る。心配して駆け寄る皆。

イヌ　「怒りを忘れるほどの…とても暖かい…家族のぬくもり…よかったぁ…」

☆　走るイノシシ。

イノ　「ぬおおおおお！！！得意分野！得意分野！進む進む！！」
ウサギ「イノシシが頑張っているここからが勝負だ…リュウには大分負荷をかけた…ここからは自分で受け渡し場所に行き…そこで終わり…リュウ」
リュウ「…ん？何か言ったか？」
トリ　「ウサギさん…限界なのでは」

ウサギ「…仕方ない。では」
リュウ「亢竜悔いあり。天に昇りつめた竜は、あとは下るだけになるので悔いがある。栄達を極めた者は、必ず衰えるという…だけどな…途中で諦めるほどの後悔は…無い！」
ウシ「あはは！気合だな」
トラ「ここから最後まで」
ウサギ「走りぬく」
ヘビ「シシシ…何があるかわからねぇけどなぁ」
ウマ「行くしかないね！」
ヒツジ「うん！」
サル「最後は？」
トリ「それは勿論」
イヌ「決まってるでしょ…」

☆ ネズミを見る。

ネズミ「ぼ、ぼく…」
イタチ「皆、お前に動かされた」
ネコ「1番から始まって1番で終われればいいじゃない」
ネズミ「…わかった。あと2日…どうなるかわからない…何も無いかもしれない。でも…皆と走れて…！嬉しかった！」

☆ 沈黙の後、笑う。

ウサギ「ま、そもそも間に合うかも分からないかけだしね」
トラ「行こう！皆で」
全員「おう！」
ネズミ「イノシシ…頑張って」

☆ 走り続けるイノシシ。

イノ「…なんだこれ！！疲れを感じない！？」
水天「これが後のランナーズハイです♡」
イノ「うおおおおおお！！！行ける何処までも！！遠く！遠く！！」

☆ イノシシ、スロー。

イノ「でも…なんだ？虚しい…走ってれば楽になったはずなのに…楽になれない…汗かけば…多くの事を忘れられた…それなのに…なんで？こんなに気持ちがすっきりしない…？？疲れてないのに…何故…ああ…ああ…そうか…一人で走る事になれてたからか…皆の言葉や顔がちらつく」

☆ 回想。

ウサギ「倍走る？？」
イノ「ああ！任せてくれ！！」
ヘビ「シシシ…死にたいのかな？」
イノ「いや！全く！！走るのは得意だ！だから…」

☆ 回想終わり。

イノ「自分の為じゃない…誰かの為に走る…誰か？皆？？すっきりしない…なんで」
ネズミ「イノシシー！！」

☆ リュウが通る。応援する皆。

イノ「…あれ？なんだこれ？ああ…忘れてたのは、この気持ちか…一番忘れちゃダメな事だな！このイノシシ…どうやら…一人じゃなかった！！」

☆ 叫ぶ。

イノ「任せろ！！！！あはは！！！」

☆ 手を振る皆。

イノ「ああ！行ける！！待っている者がいるのなら！！どこへでも！！なんだか！！！」

☆ 笑う。

イノ「久しぶりに笑ったなぁ」

☆ 全員揃う。

イノ「ウシー！！！」
ウシ「おおおおおおおおお！！トラぁあああ！」
トラ「まだまだぁああ！！ウサギ！！」
ウサギ「はーい…てね！！ちぎれるまで…飛べぇ！！リュウ！！！」
リュウ「ヘビぃいいいい！！！遅れるなよぉおおお！！」

ヘビ「誰に…言っているぅううう！！！」
ウマ「ヘビ！こっちだ！！うおおおらあああああ！！自由に行け！ヒツジー！！」
ヒツジ「苦しいのは皆一緒…いっしょなんだぁあああ！！！」
サル「繋ぐ繋ぐ！！背筋よく！！つなげぇえええ！！トリ！！！」
トリ「暑苦しいのは好きでは無いですねぇ！でも！今は！！この命！！燃やす時！うおおお！！」

イヌ　「トリぃいいい！受け取った！！タスキが熱い！皆の想いを！うおおお！！」
イノ　「走れる！！まだまだ最後のその時まで！！」
全員　「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」

☆　ネコとネズミ。

ネズミ「あれ？…ネコ？？」
ネコ　「なに？次は私だけど」
ネズミ「え…」
ネコ　「私が追いかけなきゃ…誰がアンタを追いかけるの？？？」
イタチ「１は俺だ。もう人の目など気にしない。やるべきことをやる」
ネコ　「はぁ！？アタシが先！」
イタチ「いや…順番は俺だ」
ネコ　「きー！なんなのよ」

☆　笑うネズミ。

ネズミ「あはは…。…ありがとう。皆」
ネコ　「ってことで行きな。イタチ！！」
イタチ「？」
ネコ　「任せたよ」
イタチ「…理解した。行くぞ、ネズミ」
ネコ　「イノシシ」

☆　イノシシが来る。ボロボロ。

ネコ　「受け取ったよ」
イノ　「走…れ…運命を…人生を…」
ネコ　「はぁ？何言ってんの」
イノ　「…」
ネコ　「…お疲れ、じゃ…いきますか！！」

☆　ネコが走る。

ネコ　「うあああああああああ！！！！十二支じゃない…それが何…！！感動的な事！？要らない！！今は！！今だけはぁあああ！！あいつの為に走った皆の思いだけで走るんだ！！それがぁあああ！全てだぁあああイタチぃいいいい！！！」
イタチ「感謝する…ネズミ…！！！！この想い！！必ず後の世界に繋げよう！！！！うおおおおおおおお！！！後…！！１２時間…！！！！行けるだろぉおおおお！！ネズミ——！！！！！」

ネズミ「ああああああ！！！！！ちぎれろ！それでも！はしれ！遠くへ…！遠くへ！！！！
一歩でも遠くへ！！声がする！！皆の…！！その期待に応えるんだ！！何としても
！！このタスキを！！！届けるんだ！！！次の十二年…どうなるか分からない！！
皆の十二カ月がどうなるかもわからない！！それでも…！それでもおおおお！！」
全員「行けー！ネズミー！！！お前は！！！カッコいい！！！！」
ネズミ「届けるんだぁあああああ！！！！！！！！」

☆　日が昇る。

＊　新たな５ページ「彼方」

☆　ネズミが門をたたく。

釈迦　「…」
ネズミ「…もって…きました…」
釈迦　「…１２秒前…わかった。ありがとう」
ネズミ「あけまして…おめでとうございます」
釈迦　「…ネズミ。君は約束を破った。もう十二支では無いと思え」
ネズミ「はい…！」

☆　門が閉まる。倒れこむネズミ。皆が集まって来る。

ウサギ「これは…」
ウシ　「どうなった…」
トラ　「間に合わなかった？」
ネズミ「…」

☆　親指を立てる。

全員　「よっしゃあああああ！！！！！」
イヌ　「あはは！なにが良いのかわからないけど！！」
イタチ「たどり着けたのだな！」
ウシ　「あはは！！！」
ウマ　「しんどかったぁ」
ヒツジ「ね！」
サル　「でもなんだろう」
イヌ　「この想い」
ネコ　「それは言わなくてもわかるでしょ？」
リュウ「全員で達成する」
ヘビ　「充実感？」
イノ　「やり遂げた！！」

全員　「疲れたぁあああ！！！」

☆　全員倒れ空を見上げる。

ウシ　「あーでも。今年でまた忘れるんだな」
トラ　「うん」
ネズミ「でも…次の年に渡せるよ…きっと」
全員　「？」
ネズミ「今年は来年に向けていい年だったって！！」

☆　皆がうなずく。

水天　「はーい！いい所ごめんなさーい！！」
ネズミ「神さまは？」
水天　「失礼！私も神さまよ？？？…少し野暮用でね？代わりに私が…感動的瞬間で悪いのだけど…『忘却』を始めるわ」
全員　「はーい」
水天　「…何も無いの？」
ウシ　「聞いてるし」
トラ　「また頑張るしかない」
ウサギ「駄々こねるような事じゃない」
リュウ「次の世代」
ヘビ　「来年に向ける」
ウマ　「そういうこった！」
ヒツジ「学んだしね」
サル　「もう犬猿はおしまい」
トリ　「覚悟も無く」
イヌ　「ここに居る訳じゃない」
イノ　「好きで」
イタチ「ここに居る」
ネコ　「ま。神さまには分からないでしょ」
ネズミ「あはは…泥臭いんです」
全員　「僕らは」
水天　「そ…聞いているならいいわ。十二ごとに変わらないといけないの。次の世界の為にね…記憶はなくなる…でも、皆、覚えてる？」
全員　「おやすみの時間！」
水天　「じゃあ…ウシちゃんからね。なにか言う事ある？」
ウシ　「崩壊はとまったのか？」
水天　「ええ。皆が頑張ったから…でも生まれ変わる事はどうしても避けれない…ごめんね」
ウシ　「なんで謝る」
水天　「で？言いたいことは」
ウシ　「楽しかった」

水天　「それだけ？」
ウシ　「それだけ」
水天　「記憶をなくすのよ？分かってる？」
ウシ　「分かってるからこそ。…ああーじゃあ1個だけ…乗せてやる事もいい事だ。ニバンボシって生き方あるぞ？なぁ？ネズミ」
水天　「…おやすみ」

☆　ウシの記憶が消え、座る。皆、それを見て実感が沸くが曲がらない。

水天　「トラ」
トラ　「んー…なんでしょう。耳元でささやく言葉は…きっと自分の劣等感。そんな自分に」

☆　皆を見る。

トラ　「かっこいいって言ってくれる人がいた事…忘れちゃダメかなぁ？」
水天　「おやすみ」

☆　トラの記憶が消える。

ウサギ「拒絶の先に発明は無い。ひきこもる事と考える事は違う。新しい世界に踏み出してみれば？はい。終り。どうぞ」
水天　「おやすみ」

☆　ウサギの記憶が消える。

リュウ「空を目指せばいいと思っていた。でも、共に見る景色の方が美しい。それはきっと一人よがり」
水天　「おやすみ」

☆　リュウの記憶が消える。

ヘビ　「シシシ…蛇行する事…それは悪い事じゃない…脱皮とは…」

☆　皆を見る。

ヘビ　「自ら…行わなくても出来る…シシシ…楽しかったよ」
水天　「おやすみ」

☆　ヘビの記憶が消える。

ウマ　「あー…俺か…実際来るとちょっと嫌だなぁ…なーんて。狭いって思うのは自分だ！
空は高い！！道は遠い！！行ける所は…無限だ。自由ってそういう事だと思った…
今更だよな…あはは」
水天　「おやすみ」

☆　ウマの記憶が消える。

ヒツジ「苦しい、辛い、言えばいいのに。それは皆…一緒だよね？でも…でもね…分かち合
う事…荷物を分ける事って…出来ると思うんだ…皆」
水天　「おやすみ」

☆　ヒツジの記憶が消える。

サル　「まっすぐ！背筋を伸ばしてまっすぐ！！知識だけでは何もならない！力だけでは解
決しない！！そういうものだ！！大事なのは…」

☆　イヌを見る。

イヌ　「？」
サル　「生涯の親友を持つ事だ…なぁ…イヌ」
水天　「おやすみ」

☆　サルの記憶が消える。

トリ　「決まっている事なら仕方ない…成熟してたつもりでしたがー…あれです。なんと
いうか…」

☆　トリが微笑む。

トリ　「寂しいと感じてしまうのは…やっぱり…！中途半端だったんですね…！！！」
水天　「おやすみ」

☆　トリの記憶が消える。

イヌ　「…何？別にこれでサヨウナラ？そういう訳じゃないでしょ？ネズミ！！」
ネズミ「なに…？」
イヌ　「アンタがどうなったって…私…待ってるよ。雨でも雪でも嵐でも…暖かい気持ちを
ありがとう」
ネズミ「ま、まって…！」
イヌ　「バイバイ」
水天　「おやすみ」

☆　イヌの記憶が消える。

イノ　「んー…忘れるという事は辛いな！！あはは！！でも！！皆ぁああ！！イノシシは…！！笑えたぞ！！！ごまかすことなく！！心から！！！それで…いいだろう」
水天　「おやすみ」

☆　イノシシの記憶が消える。

イタチ「…目に見えない言葉に惑わされるな。それがお前の真実だ」
ネズミ「イタチ…」
イタチ「次は…十二の中に入れますように…」
水天　「おやすみ」

☆　イタチの記憶が消える。

ネコ　「はぁ…私はまた騙されるのかしら？」
ネズミ「ネコ…！！」
ネコ　「あはは！いーのよ！楽しかった！また追いかけさせてね？」
ネズミ「あああ…」
ネコ　「大丈夫！アンタの覚悟はみんな知ってるよ！今度こそ食ってやる！！…ってね」
水天　「おやすみ」

☆　ネコの記憶が無くなる。

水天　「…」
ネズミ「あああああ！！あああああ！！！！！…僕は…なんで…一番なんだ…情けないのに…かっこ悪いのに…！！」

水天　「…いい？ネズミちゃん。貴方は！間違ってなかった！！長い歴史の中で！貴方だけが神様を裏切ってまで！仲間がいたの！！貴方は…！！皆が認める！！最高にかっこいい！！」

☆　皆が笑顔で親指を立てている。

ネズミ「皆…」
水天　「最後に何が言いたい？」
ネズミ「…楽しかった！！！皆との日々とこの１２日は！！僕の！！宝物です！！！」
水天　「さようなら」
ネズミ「皆！僕！来年居ないかもだけど…！！許してね！！」
全員　「忘れるか！！」

☆　泣くネズミ。

ネズミ「あああああ…あああああああ！！！！！」

暗転

＊　新たな６ページ「新年」

明転

☆　釈迦が居る。

釈迦　「どうか。また彼らに想いを下さい」
神　「何を言っているか分かっているのか？」
釈迦　「ええ。わかっています」
神　「なら」

釈迦　「では！神は学ぶことが無くなった者なのでしょうか！？このタスキをみて下さい！！あの子達の血と！汗と！！涙の結晶です！！！これをなんのことも無いゴミだというのなら！！私は神を辞めます」
神　「幾千、幾万と神は居る。お前は１２の苦行をやり直せ」
釈迦　「わかりました。ネズミを…よろしくお願い致します…最後に」
神　「なんだ？」
釈迦　「ネズミと話させてください」
神　「…良いだろう」
釈迦　「ネズミ」
ネズミ「はい…」
釈迦　「私が君を一番に選んだのはね？？」
ネズミ「？」
釈迦　「君は…僕に似ているからだ…ダサいよね…それだけ…それだけなんだ…」
ネズミ「何故…記憶を黙っていろと？」
釈迦　「言えない事を抱える…それが最も『人』らしい」
ネズミ「言えば楽なのに」
釈迦　「だから君は言った。凄い事だ」
ネズミ「神様だって…」
釈迦　「ん？」
ネズミ「神様だって言った…。…かっこいいです！」
釈迦　「あはは…！ネズミはよく言われてたな…でも、それも」
二人　『『諸説あり』』
ネズミ「あ」
釈迦　「あ…」

☆　笑いあう二人。

釈迦　「諸説…じゃないよう…僕は頑張るよ」
ネズミ「え？それって…！！」

☆　釈迦が離れていく。

水天　「あら？願いはかなえたの？」
釈迦　「どうも。水天様」
水天　「…前代未聞よ？神があの子達の代わりにやり直すなんて。なんで？」
釈迦　「十二支…１２の記憶を…守りたいからです」
水天　「敬語辞めてよ、気持ち悪い」
釈迦　「いえいえ。水天様は神様なので…では」
水天　「お釈迦様」
釈迦　「…」
水天　「アンタ。カッコいいわ」
釈迦　「はは…だろ？」
水天　「やれやれ…十二支の物語…むかーし、むかしのことです。神さまはこまっていました。仕事を頼んでもすぐにけんかが始まる事と、けんかになると体の大きな動物が小さな動物に言う事をきかせていた事です。ある年の暮れに動物たちを集めて言いました。来年からリーダーを決める。一年ごとの交代制にし、リーダーに従って仕事をしてもらう。来年の元旦にあいさつに来た、１番から１２番までがリーダーだ！と…でも今年は違います」

ウシ　「ウシだ！」
トラ　「トラ…です」
ウサギ「ウサギ」
リュウ「リュウだ」
ヘビ　「ヘビ…シシシ」
ウマ　「ウマだー！！」
ヒツジ「ひ、ヒツジです」
サル　「背筋をまっすぐ！サルです！」
トリ　「コケー！トリ」
イヌ　「イヌー」
イノ　「あはは！イノシシだ！」
水天　「それに加え」
イタチ「イタチ」
ネコ　「ふあぁぁあ…眠い。ネコ」
水天　「一つの場所に集められ…レースをすることになりました」

☆　ネズミが来る。

ネズミ「おかえり…」

☆　皆が見つめる。

ネズミ「って覚えてな…」
皆　　「ネズミ…ただいま！」
ネズミ「え…」

☆　親指立てる。

ネズミ「皆…！！…今回はここから競争して、決めよう！リーダーを！」
水天　「釈迦という神が他の神に頼み込んで…新たな形になりましたとさ」
ネズミ「いい！？よーい！」

☆　走る態勢になる。

水天　「考察とは一万ある中の一つに当たればいい！このお話は諸説ある中のたった一つ。
　　さ？来年は…」
ネズミ「スタート！！」
水天　「どんな年になるのかしら？愚かな一つの…物語。『諸説あり』…と」

☆　皆がスローで楽しそうに走る。

来年はどんな年になるのだろう？これはそんな未来に向けた笑顔の物語。

終演